定義集

u_

＊＊＊
鳥に於ける

器とは何か

土竜のように穴を掘り進んでいると、海の底を這っては隣の星の事を考えてばかりいた頃を思い出す。海に入るとただ考える事しか出来なくなって、海流に運ばれるまま危険が迫っていたとしても意に介さなかった。その海を何故捨てたのかは忘れた。隣の星の事ばかり考えるのに飽きたのかも知れない。今はただ天敵から逃れるために穴を掘り進めるしかない。海に居た時と同じ奴が天敵

だった。同じ時期にそいつも陸に上がったのだ。姿を見た事はない。食われる瞬間にその姿を拝めるかも知れないが最悪な想像だ。耳元を唸りが掠めたので進むのを已めた。目の前で蝿が蝿を組み伏せていた。穴の中に落ちても二匹は夢中で番おうとしている。羽を激しく震わせて、それは隣り合う二つの星に見えた。ただ隣り合うだけで星と星は番っているのだ。海の底に戻ってこの続きを考えたい。何が何でもそうしたい。鳥が何時までも土竜の真似をしていて何の得があるのか。などと思い巡らして土を掘らずにいるだけで、鳥は口から泡を噴いていた。中に一つだけ他の泡をどんどん繋げて大きくなる泡がある。その中で蝿は番っていた。鳥はそれを二匹とも食って、海底や地中では必要のない遠くを見通す視力を得た。しかし気が付くと泡の中に閉じ込められていて、その泡だけが穴の中をすっかり占めていた。内側に膜を張ったのと同じで、その膜に遮られて穴に落ちて来る筈の虫も落ちて来ない。穴の中でも寝る所だけは決まっていて、このまま飢えて死ぬにしてもそこで死にたい。何とか辿り着くと、そこにはギザギザした白い木の根が浮き上がるように生えて鳥を寄せ付けない。鳥だけでなく泡もそこへは近寄れなかった。泡は鳥に言った。「海の底でもお前は何も食べていなかったんだ。星の事だけ考えていればいいんだが、星の事ばかり考えている自分について考え始めると、お前は大抵口から泡を噴いて、その自分の噴いた泡に呑まれていたんだ。分かるだろ。今じゃ遠くまで

見通せるんだから」「自分の噴いた泡が天敵だったのか、それを分かるためにだけ目は見えるようになったのか」と鳥が嘆くと木の根が言った。「泡は本当の事を何も言っていない。寝たり死んだりする所だと思うから近寄れないんだ。食う所だと思って来いよ。」それで根の端を嘴で突つくと鳥は木の根に呑まれた。木の根の中を運ばれる内に、鳥の体は砕けた白い骨ばかりになり、地下水脈に吐き出されて遂には海に出た。散らばった骨は暫く海水を弾いて水の上を跳ねてから、潮と潮のぶつかる波の泡に紛れて沈んだ。バラバラに海底に沈む骨となっても、鳥はまた隣の星の事を考える。もう泡を噴く心配もない。それで段々と一箇所に集まった細かな骨は、互いを摺り合わせて、隣り合う星と星の番う姿を様々に描き、それらを隙間なく繋げて星のための器を作った。その内側に鏤められた星々は、番いながらも最後は自分独りの事を考えたので泡を噴き、その自らの泡に次々に呑まれて消えるが、鳥の骨の考え出す星々の番う姿に際限はないので、器が破れて星の精が漏れたりする事はない。（二〇〇六年八月二十五日）

円とは何か

何時もそこまでは飛ぶが、そこで必ず何か怖くなるのか引き返す。そこに鳥はしっくり来る呼び名を付けたかったが、それまで何かに就いて名を呼んだ事がない。名を呼ぶにはどうすれば良いか。それを教えてくれる所を訪ね、何かにそれぞれ呼び名を付けたいもの達と共に学んでいた。先ずそれは遠い道程だと教わった。鳥はまたそこまで飛んで引き返した。すると誰かが来ていた。客をもてなすように水を出した。客はその水で死んだ。水を出してはいけなかったのか。それとも死を望んで鳥の水を飲みに来たのか。何時もそこまで飛ぶその先にその答えがある気がした。そこで引き返してしまうのは、それを知るのが怖かったからだ。鳥の力だけでは死体を動かせないので、せめてその影だけを穴に埋める事にした。共に学んでいるもの達が手助けに来たものの、用意された穴はその外側は眺められたが、中に通じる方法が知れなかった。穴の外側は氷のように死体よりも冷たく、皆その冷たさに触れて眠りこけた。そこへ、ま

だ名付けられていない世界から、穴を運ぶ時に壊れた橋を直しながら渡って、骨のない奴が遣わされ彼等の眠りを吸い取って廻った。彼等はその眠りからしか目覚められない。だから眠りを吸い取られては、目を覚ます事は叶わない。しかし目覚めてしまっては叶わない事が、眠りばかりの中で叶えられていた。本人達には分からないが骨のない奴だけは、それを眺められた。鳥が何時もそこまでは飛ぶ先から暖かい陽が差して穴の外側を暖めた。それで穴に穴が開き、眠るもの達はその穴に弾かれて、陽の届かない冷たい方へ流されて行った。鳥だけは死体の影に巧く遮られて穴に弾かれずに済んだが、死体の影は陽の届かない方よりもっと冷たくて、鳥は眠るままだった。骨のない奴が死体を抱き上げ、穴の穴に頭から突っ込んだ。穴の穴がそれを喰らうように死体は穴の中に納まった。それを鳥は目を開けて見ていた。その鳥の目は穴で、穴の穴が鳥の目の瞳孔だった。鳥の目の中の死体は、鳥の望むように踊った。その踊りに節を付けながらであれば、何時も引き返してしまう先まで飛べた。そしてその先にはもうその先がなかった。鳥は、死体の影を真ん中に置いてその周りを円を描いて飛び続けるしかなかったが、それは眠りの中でだけ叶えられた事を思い出させ、眠りの中でも円を巡ったように思えて仕方ない。（二〇〇六年七月十日）

数とは何か

目を病んでいた。島を目指していた筈が病んだ目だけが先に行ってしまって、その後を追うのがやっとだ。その目とは細く赤い光線で辛うじて繋がっていたが、それも一頭の蝶に遮られた。鳥の全身にその蝶の柄が描かれた。それまでただ風に乗っていただけだったと気付いて羽ばたくと、鳥の翼は蝶で出来ていて、その蝶の群れが飛び去った。鳥の翼は骨だけになって、それでも羽ばたくと骨は鳥の肉に突き刺さった。そうして翼の自由を奪われたが、そもそも骨だけの翼の自由など飛ぶには無用だ。突き刺さった骨が、診察でもするように内臓の音を聞き取っている。その音を頼りに鳥は飛行の無事を祈った。それでもまだ鳥が飛べているのは偏に病んだ目のせいだ。その目を見失った。いや細く赤い光線が何条にも増えていた。それならその先の目も増えているのかも知れないが、光線に遮られて分からない。そしてその光線も更に増えるか滲むか重なり合うかして、前はただぼんやりと赤いだけになった。風が先回りして、も

う飛べない鳥を下から掬うように受け止めた。風は長く醒めない夢を見ていて、それを始めから鳥に語り出した。語りが段々今見ている夢に追い付いて来る。それが鳥を不安にした。過ぎた夢でなく進行中の夢語りを聞かされるなら、鳥は風の夢に呑まれて風の夢の一部になって、その風の見た鳥の夢が語り終えられれば、鳥もまた過ぎた風の夢となって消えるしかない。語りに追い付かれないように夢の速度を上げるしか自らを救う道はない。そう思って鳥は、己の身を風の夢の先頭に立てて風より速く飛ぼうとした。そんな鳥を風にはどうにも出来ない。鳥は風から落ちた。風からは落ちたが、何処かに落下して行くのではない。鳥は、自らを映す鏡の中に身を乗り入れるかのように鳥の姿に留まって、そこからどのようにも飛ぶ事が出来た。ただ目指した島も病んだ目もぼんやりした赤みもなくなって何処へも進めないなら、飛ぶ振りをしているのと変わらない。それどころか鳥の振りをしているだけかも知れない。つまりは自分は老いてしまって、何かに成るための若さを失い、もうその成れない何かの振りが出来るだけなのだ。それは風が最後に見る夢の鳥の姿だった。そうしてその飛ぶままに鳥はまた風に掬い取られて運ばれた。島が見えて来た。近付くと島は真ん中から割れて二つだった。その片方の島に近付くとまた真ん中から割れて二つだった。風はそれ以上近付くのを已めて鳥の体を真ん中から二つに裂き、その片方をまた二つに裂いて夢を見終えた。鳥も風も二つより多い数は要

らない。だからどちらも空を飛べる。（二〇〇六年七月二十五日）

気紛れとは何か

何時も独り先に行って土地の神を導くのは陽の色の泥で、それに遅れるのが月夜だった。振り返ると火の壁が立ちはだかり土地へは戻れない。振り返ったのは月夜だけで、火の壁に見とれて月夜だけが愈愈遅れ、月夜の裏側に死んだ神がお守りを隠しておいたのを火の壁に全て奪われた。それで月夜はもう火にくべられる石炭と同じだったが、死んで鬼になった神が月の光りだけを救い出し、それを紙のように薄く延ばして火の壁に貼った。土地は長く地滑りに苦しんでいた。その経過が月の光りの掲示板に彫られた。彫られたのは三角形ばかりでそのあちこちから火が噴き出し、尖った音が跳ね上がって波打つ。独り先を行く泥はそれで初めて火の壁に気付いた。火の勢いに、月の光りに彫られた三角形は踊り出し交わった。交わる時だけ火は押し込められ、尖った音は更に尖って土地の神の頭を越え泥の足元まで飛んだ。土地の神は、それを恐れ自らの首を切り落とすのとそれを喜び翼を生やすのと、二つに分かれた。首を切り落と

した神はそれぞれの月夜を探しに行った。翼を生やした神は跪いて泥の端を啜った。そうしてその口が陽の色の嘴になると、迷わず火の壁の方へ飛んだ。燃え尽きないものはなかったが、その灰が集まって翼を拡げる鳥の形になって火より高く昇った。その灰の鳥の頭蓋の中で、何時までも陽が暮れ泥んでいる。なその陽を落とすための占いが月の光りを使って行われるべきだが月の光りがない。首を落とした神が月の光りを粉にしたものを持ち込んでは来たが懐に隠して、その辺りに落ちている筈もない月の光りを探す振りをするだけだった。そうして首を落とした神は鳥の頭蓋の中で次々に灰に埋もれて、頭ばかり重くなった灰の鳥の首が崩れ落ちた。首をなくした灰の鳥は、ない首を振るような同じ動作を繰り返したせいで地滑りを引き寄せ、地滑りに巻き込まれ、辛うじて鳥の形は保ったが翼は地べたに擦り込まれて直に埋もれてしまいそうだ。暮れ泥むままの陽も受けて俯せの灰の鳥は尻から子供を産み続けた。鳥から生まれはしたがどれも鳥ではない。灰でもない。それらは地べたよりも速く滑り降りて土地より更に低い所を落ち続け鳴き続けた。それらは次々に変わる己の名を売るのだった。変わり続ける鳥の名は占いに使える。買い手は一人しか現れないし無一文だが、そいつは鳥に体を売って、その抜け殻の中に鳥の名を溢れさせた。鳥の名の一つ一つが一本ずつの羽になって生え、抜け殻は鳥のように羽を纏って抜け殻には見えない。そいつは腰から下に羽の数と同じだけの蛇の尻尾

を生やし、それがキラキラと蠢いて陽を脅した。怯える陽に月夜が呼ばれ、首を落とした神の影と翼を生やした神の影がどちらも羽と同じ数の蛇の頭になって月夜に籠もった。それらは直ぐにも火にくべられる定めだが諦めてはおらず、鳥の名を呑み込み続けた。呑まれた鳥の名が火と反対のものになって月夜から溢れ出ると、火の壁は半分にまで衰えた。火と反対のものに息を詰まらせて月夜が死んだので、陽は遂に暮れなかった。火と反対のものは羽を纏った抜け殻の中で成長したが、幾ら成長しても腰から下の蛇の尻尾を出鱈目に操る事しか出来ない。それでも段々と羽が毟れ蛇の尻尾が磨り減って剥き出しの抜け殻になってしまっては、火と反対の姿を晒すしかないが巧く出来る筈もない。ただ何処へか降りて行くために、気紛れに鳥の鳴き真似に耽って明けない闇夜を更かす。（二〇〇六年十一月二十五日）

煙とは何か

万物は流転する。とは嘘で、世界はそのように見せ掛けられてさえいない。精々万に一つ位が流転する。万に一物は流転する。それもそうと断言は出来ない。そう見せ掛けられているだけかも知れない。抑も万物は流転するなどと言い出した奴がいたので万に一物は、流転するなどとも言わされてしまうだけで、始めから言い出されていなければ、何がどれだけ流転するもしないもなかった。そうは思っても浅い硝子の器を足で傾ければその中の卵の黄身は流転していた。黄味はその密閉された硝子の器にどうやって入り込んだのだろう。器を踏んでしまったからには、そのまま跨いで通り過ぎる訳にはいかない。屍に躓く方がまだ増しだ。屍が流転して行った後の抜け殻でしかなければだが。それに比べ卵の黄味からは逃げ場は見付からない。卵を葬る事は出来ない。それに寄り添うかそれを持ち歩くかのどちらかだ。勿論器に閉ざされていなければ呑んでしまえば済む話しだが、泥濘んだ斜面をずり落ちていた。このままでは硝子の器

を見失ってしまう。それは事態を悪くしかしない。頭の中にまで泥は滑り落ちて来て、泥塗れの頭の中に埋まった卵の黄身が硝子の器を求めて脹らみ始めていた。卵の黄身の脹らむのを防ぐために硝子の器が用意されたのだと腑に落ちた。卵の黄身はずっと前から頭の中に潜んでいてこの機会を待っていたのだ。翼はすっかり傷んでスカスカで、風を孕んでにも透けるだけだ。いや鳥であるのさえ忘れていた。翼は耳だと思っていた。耳飾りをいっぱい着けようと翼の肉を食う虫をそこに飼っていて、そいつは今も仕事に励んでいる。卵の黄身はもう頭を破裂させそうで、その音から少しでも逃れようと泥の斜面に頭を突っ込んだ。その拍子に泥の中で微睡んでいた鼠に嘴が当たりそのままそれを呑み込んだ。鼠は鳥の胃も腸も躱して鳥の頭の中に落ち、卵の黄身を囲む円の上を走り続けた。鳥は腹が痛くなった。鼠の腹痛が伝染ったのだ。その痛みを紛らすには鳥も泥の斜面を円を描いて走り回るしかない。両翼とも直ぐに重い泥に千切れてなくなった。事前に察した賢い虫達は鳥の頭に避難した。その虫を鳥は頭を振り振り宙に放り上げて順々に啄んだが、呑み下された虫達は喉の奥で小さな下を向いた炎になって、その勢いを集めて鳥を宙に舞わせようとした。鳥にしてみればとんでもない話しだ。泥の重みで頭蓋を圧して何とか卵の黄身の膨張に対処出来ているのだ。虫達は鳥の胃も腸も躱し、いきなり鳥の肛門に達してそこから火を噴いた。万物は流転するのか、万に一物くらいが流転する

のか、答えは肛門の働き次第だ。肛門にへばり付く泥が焼けて煙が上がった。裏切り者への憎しみを込めて鳥は自らの肛門に嘴を突っ込み、虫の火を引き摺り出してまたそれを呑み込もうとした。嘴の内側が焦げ、ドロドロに爛れた嘴は使い物にならないどころか口を塞いで開けられなくした。勢い付いた肛門の虫達は火を一方向に鋭く集めて噴射力を高めた。鳥の体が泥の斜面に沿ってクルクル回り、泥を焼いた煙は次々に円を描いて硝子の天井に向けた放たれた。鳥に見渡せる限りまでを硝子の器が閉ざしていて、そこに籠もる煙は段々と景色を霞ませたが物の形がぼやけるまでにはならず、煙の中に浮かぶ卵の黄身は隅々までくっきりと見渡せた。（二〇〇六年十月十日）

さすらうとは何か

陽に照らされて岩肌は贋物だと分かる。やや俯きに突き刺さる巨きな獣の皮で出来た尖った仮面に全身を隠し、一度もしなかった事を思い浮かべようとしている。山を登る巨きな獣の輪郭を描く声が差し入れられた。その描かれた輪郭は山を憎んで稜線に溶け、溶けた輪郭が稜線を溶かす。陽が仮面の裏まで突き抜けて体は声の方に捩れた。仮面から食み出たねっとりした肉を恐れたか、陽は溶けた稜線の向こうに引き下がる気配だ。陽を迎えれば稜線は元の鋭い形を取り戻すだろうが、仮面が息を深く吸えば、陽は萎えて贋の岩肌に纏わり付くのがやっとだ。その斜面の下に埋もれ掛ける化石が何を指し示しているか知るべきだ。そこに描かれた印を読み解けるなら、一度もしなかった事も自ずと明らかになるだろう。獣の輪郭を描くのを已めても未だ続く声に仮面の喉元を向ければ、仮面は少しずつ仰向けになって、空を映して青ざめた。その青に目が行けば飛ぶ鳥は上下を見誤って落ちるしかないが、本当に落ちるのは透き通っ

た翼の鳥だけだ。大抵の鳥は自らの翼の色の翳り具合で上下の向きを立て直す。透き通った翼の鳥など疾っくの昔に全て落ちて絶えた筈だ。仮面に映る青だけがその勇姿に思いを馳せるが、獣の輪郭の一本の毛程もその姿は甦らない。稜線は溶けるだけ溶けて歪んで今にも崩れそうな危うい窪みを真ん中に抱き込んで、その衒えるべきものを求めて細かく震えていた。進んでそこに身を滑り落とし自らその衒えられるものに成り遂せたなら、それが、一度もしなかった事になるだろうか。しかし何もその求めに応えるものは現れず、窪みは窪みの形さえ溶かすしかなく、窪みの形の失われた痕は底も見せず透き通った。仮面は更に仰け反って自らを岩肌から引き抜き、空を向いたまま窪みの痕に近付いて行く。上下が逆様になって仮面の裏にふわりと軽い風が丸い形に含まれた。風は細く引き延ばされそうになっては、みるみる丸く大きく膨らんで仮面を宙に浮かせた。見下ろすと仮面は元の獣の形を取って、見知らぬ黒々とした稜線に向けて駆けていた。風に浮くのは仮面ではなくそれに映っていた空の青なのだった。空はすっかり透き通っている。それなら青は映ったのではなくその色ごと仮面に落ちて、また今はそこから離れてただ青だけで風を孕んで透き通るばかりの空を昇り続けている。いや仮面に落ちたのは青色だけでなく空そのもので、その空が、空でなくなった拡がりの中を昇って行く。その拡がりへ、孕まれていた丸い風が噴き上がって拡がり、その空より広い翼にでもなりそうだが

見失わて、空はまた何処へか落ちる。底も見せずに透き通る窪みの痕が、空を受け止めるしかない。いや必ずしもそう限った事ではない、ではないがそう思いたいしそう思ってしまえば、一度もしなかった事が、獣を狂わせ駆け回らせるあの黒い稜線のようにくっきりと輪郭を定めて訪れるに違いない。恐らくは化石もまた贋物だろうし、その印の示す意味にしても嘘で凝り固めてありそうだ。あのさすらって行くのは何か。（二〇〇六年十一月十日）

四季とは何か

そこにも四季がある。日の長さは変わらず寒暖もないが、音のある季節、次に音のない季節、次に音があるのかないのか分からず絶えず聞き耳が立てられる季節、次に音が忘れられてしまう季節、そしてまた音のある季節が巡る。日の長さや寒暖の変化は、季節と関わりないため気には懸けられないだけで実はある、と考えても虚しいのは、そんなもので島の景色は一寸たりとも揺るがないからだ。とこのように言葉を並べていられるのも音のある季節だからだが、それもそろそろ終わりに近いのは、日の三分の一位の間、空を震わす雷の音が鳴り已まないので知れる。そして日の残りの三分の二に音はなく、音のない季節を一足先に迎えていた。親の世代の鳥達は、体力の許す限り雷鳴の時に逃げ込む。体力がなければ、音のない時の中で体の弱るままじっと枝に留まっているしかない。音のない季節は子の世代のための季節であり、そこに取り残された父の世代はどんな辛い目に遭わされるか知れない。幼年時代を音音音に虐げら

れて来た新世代は、恨みを晴らすため何でもするだろう。しかしその折角の復讐の念は役に立たない。自分を虐げて来た父をも同じ目に遭わせようにも、音を用いずには指一本触れられないがその音がない。体力を残していた親鳥達が間違っていたのか。彼等は雷鳴の時の中でその轟音に紛れて己の身を裂いた。それはそれで己の信じる死に方の達成を彼等は悦んだ筈だが、雷鳴が絶え音のある季節が終わっても死に赴けなかった旧い世代が味わうのは、ただ生きなければならない苦しみだけだった。新しい世代は音のない季節をどう生き延びるかで頭が一杯だ。音なしで生きるのは、生まれて以来音音音に虐げられて来た新しい世代の方が実は辛い。彼等のための季節であるのは、別に彼等にとって生き易いためではなく、彼等が限られた時の中で苦役を強いられるからで、しかも何を課せられているか知り得ないが故の苦役だった。その彼等の七転八倒を静かに枝に留まって眺めて、旧い世代は慰められた。生き延びて良かったとまでは思わないが、音のある季節の世代に属せて良かったとは思った。さて次に音があるのかないのか分からず絶えず聞き耳が立てられる季節になった。そこに現れた新世代は、ただ聞き耳を立てていられる間は、それは辛くも楽しくもないが、何か生きるための事をしようとすると、音があるのかないのか分からない事は苦役などと言って済む程の辛さではなく、それから逃れるために、聞き耳を立てるよう強要して来る父の世代を手当たり次第に襲って肉を喰らった。

しかしその前の始めの世代はそれを枝に留まって眺めて慰めにもした。彼等は、聞き耳を立てたから音がどうなるものでもないと知っていたし、抑も歳のせいで何も聞こえなくなっていた。さてそうしている内に音が忘れられてしまう季節になった。当然聞き耳を立てる事も忘れられるが直ぐ前の世代にはそれは、親を食い殺す程に辛い聞き耳を立てる事よりもっと辛い。一体そんな辛さに耐えるのに、自らの存在を忘れ果てる他に何が出来るだろう。そうして彼等は消えて行った。その世代に喰われた僅かに残ったその親達、即ち音のない季節の世代は、音を忘れられて初めて悦びを知った。彼等は決してその季節から外に出ないと心に決めて、悦びに包まれた死を選んだ。逆にその前の始めの世代の心中は穏やかではない。老いて耳が聞こえなくなったとは言え、その聞こえない耳の中に音の記憶は鳴り続けていた。それを忘れようにも忘れようがないま、音が忘れられてしまう季節を生きるのは楽ではない。絶えず右が左と入れ替わり上が下と入れ替わり白が黒と入れ替わる世界を生きるようなもので、静かに枝になど留まっていられない。そうして音のある季節を待たずにその始めの世代は絶え、その屍の腹から新しい世代が流れ出たが、彼等がどのように音のある季節へと新しい世代として継がれたかは知らない。屍の腹から流れ出てから後の、その成長した姿を何処にも現わしていないではないか。音だけでなくその季節のための世代も、忘れられるべくして忘れられてしまうらしい。（二

○○六年十二月二十五日)

世代とは何か

産まれていないが揺り籠が出来上がってしまっていては、何が産まれるかは揺り籠が決める。その産まれたものを受け取って揺り籠はただ宙に浮くだけだった。揺り籠の底に張られた楕円の鏡が、産まれたものの姿を映そうと待ち構えていたが、映るのはグルグル回る外の景色が殆どで、偶に揺り籠を回す赤く太い腕が掠める。その腕の持ち主は産まれたものを奪いに来ている。しかしその腕の持ち主が産まれたのかも知れず、そうであるなら揺り籠から己の姿を取り返しに来たのだ。直ぐに取り返せないのは、籠の底の鏡に己の姿を映してしまっては、揺り籠に己の何であるかを委ねなければならないからで、己の姿を隠すまま己を籠から取り返すにはどうすべきか思い倦ねるしかないが、揺り籠の他に行き場もない。いやそれは虫の良い揺り籠の考えで、腕の持ち主は産まれたばかりのものを喰う鬼であり、産まれたばかりのものは揺り籠の中では恐れ戦く余り透き通ってしまって、揺り籠にも扱いきれなくなってしまっていた。グ

ルグル回る景色の中に小鳥が一羽現れて、それを映した籠の底の鏡が小鳥に鳴くように促すと、小鳥は安心したように次々に増えて景色を重くしその回る速さを遅らせた。小鳥達は鳴く間も惜しみ競って景色を食い漁ったので、景色は忽ち朽ちた板切れの姿になった。腹一杯の小鳥達で景色は更に重くなり、揺り籠は回るのを已めて、底の鏡にそれを映し続けた。それを黙って見ているしかない鬼はもう鬼ではなく景色と同じ朽ちた板切れだった。恐れるものがなくなったなら産まれたものが姿を現しても良さそうだが、揺り籠は空っぽのままだ。その空っぽを貪り食うように、鬼だった板切れが籠の底に落ちて砕けた。すると鏡に映る景色の朽ちた板切れも砕けた。景色はばらばらになり、小鳥達は何処か見えない所まで吹き飛ばされた。揺り籠が半回転し板切れの残骸は掃き出され、それらは一羽だけ残っていた小鳥に降り掛かった。どうしてその一羽だけが残れたのか。小鳥の恰好をした鬼かも知れない。小鳥は板切れの残骸の一片を啄んで羽繕いを終えると、羽ばたいて高く舞う振りだけして揺り籠の中に黒い糞を垂れた。それが籠の底の鏡に落ちると、鏡は鳥に食われる前のクルクル回る景色を映した。それは揺り籠に覆い被さるようにして羽ばたく小鳥の姿でもあった。別の新しい揺り籠の声が直ぐそこに聞こえるのは、場所を譲る時が迫っているのだった。直ぐにも揺り籠は何が産まれたのか決めなければならない。ただ鳥の羽音が喧しいだけなら、その羽音が産まれたと決めるしかな

い。「それでいいか」と鏡に尋ねると、籠の底はただ薄汚れているだけで何も映さない。その様が新しい揺り籠の底の真新しい鏡に映った。次の世代に引き継がれたいのだ。小鳥はその新しい鏡に映る古い籠の底の汚れのシミになって、次の世代のために与えられる時を待った。しかし待つべきではなかった。待つものには訪れない。汚れのシミのまま小鳥は朽ちた。見えない所まで吹き飛ばされていた小鳥達が次々に戻り、そのシミを見下して糞を垂れ、揺り籠の端を啄んでは巣の材料に持ち帰った。丸裸の糞塗れの鏡だけになると、それはクルクル回る景色の中を自在に飛んで、振り払われた糞が小鳥の鳴き真似をすると翼が生えて、渡って行く小鳥の群れになった。その渡り鳥だけが鳥の卵から孵った鳥であって、揺り籠に寄って来たりしていた鳥は、産まれたばかりのものを喰う鬼に違いない。そう考える鏡に映る汚れのシミが残るなら、産まれたのはそのシミであり鬼に喰われずに済んだ訳だが、そのシミが小鳥となって飛び立って次の世代の時を追えば、それは自分でも驚くばかりに非道な鬼だった。

（二〇〇六年十二月十日）

騒音とは何か

一日一度空気を換える時を見計らうように煙が上る。腐った水と女の足の臭いがして耐え難い。時はずらせない。決まった時より早く換えると中の空気は未だ軽過ぎて、重い外からの空気が凶器さながらの爆風となって襲って来る。決まった時を過ぎて換えようとすると、重過ぎる中の空気に、外の空気は太刀打ち出来ない。決まった時にだけ外の空気は、臭い煙を伴ってゆっくりと入って来る。外と触れるのはその換気の時だけだ、と一応は信じている。と言うのは、換気を終えて腐った水と女の足の臭いに充ちた空気に閉ざされると、途端に猛烈に小便をしたくなって目の前の景色が様変わりし、遠くに行く程拡がっていた景色が遠くに行く程狭くなって、最後には行き止まりの尖った角になって、その角目掛けて真っ直ぐ飛んで行って、その角を突き破った奥に小便をぶちまけなければならないからだ。そしてその後は放尿の達成感に浸り切ってすっかり痺れてしまう体をどうにも出来ず、丸一日を過ごすしかない。そこでどんな

景色も見えて来ないままに、また一日一度の換気の時が巡って来る。もしも様変わりする景色を放って置いて、小便は別の所に垂れ流したとしたら、恐らく、狭まって行く景色の尖った角が破れて、景色諸共その先へと吸い出されてしまうだろうか。それで景色の向こうには出られても、そこでまた一緒に出て行った景色の中に閉ざされてしまうだろうか。それとも逆に景色を閉ざすような果ての無い体を得られるだろうか。勿論何度も試みようとした。しかし鳥である限り、どうしても景色の果ての尖った角目掛けて小便をしに飛んで行かなければいられないのだ。その鳥も年老いた。あの世から蛸が迎えに来た。蛸は腐った水と女の足の臭いがした。いや元々それは蛸の臭いだったのだ。「あの世はどっちだ」と蛸に尋ねたのが間違いだった。蛸は八本の脚を絡ませてその場ででんぐり返しを打つばかりになった。それを見た鳥は猛烈に小便をしたくなった。景色は伸びたり縮んだりして蛸と大立ち回りを演じた果てに、蛸以上にこんがらがって蛸に組み伏せられた。その景色の黒ずんだ塊目掛けて、蛸溜りに溜まった小便をぶちまけると、その小便を伝って景色の塊は鳥の体内に入り込んだ。蛸は縺れた脚を解いて「あの世はどっちでもない。だけど仕返しに周りをぐるりと海にしてやる」と言ってその海に沈んだ。鳥はただ景色を腹に収めた事を思い出しさえすれば良かった。それだけで両眼が鋏になって海を切り開けた。しかし切っても切っても海の切れ端が増えるだけで、それらは直に腐っ

て蛸の臭いを蛸よりずっときつく放った。それを耐え難い気持ちで嗅ぐ度に鳥の足が長く伸びて、海に足を浸けたまま体は天に届いた。そして自分が無事死んだのかどうか知ろうと天の景色を見晴らそうとすると、恐ろしくうるさい音に妨げられた。慌てて両眼を鋏にすると多少収まったが、猛り狂う音は天の隅々まで届くようだった。両眼の鋏でその騒音をどんどん切って、その切れ端が更に酷い音を鳴らすと、更に足が伸びて天の頂上の尖った角まで体は届いた。そこに体を差し込んで真下を見下ろすと、一瞬で一切の音は已んだ。それはしかし天の尖った角に向けて小便をぶちまけている間だけだった。小便を飲み干した天は溶けて崩れて海と一つに混ざったが、鳥を苛む音は絶えない。（二〇〇六年九月二十五日）

中心とは何か

全て丸い物は進化を拒むので醜い。の筈がザラザラした斜面に向かおうとする丸い物が一瞬白金のように輝いて見えた。丸いまま何かに変わろうとしている。斜面のザラザラしているのは、嘴の硬さを競い合った鳥達の突ついた跡だ。その斜面に降り立てるのは何万羽からの選りすぐりの鉄のような嘴を持つのばかりで、おいそれとそんな奴が現れる訳もなく、大抵は斜面は静まりかえっている。そんな所に丸い物が何の用があるのか。自身もまだ迷って斜面の手前の緩やかな盛り土の周りを回っている。そうこうする内に霧がその表面を濡らし段々と赤い土がこびり付いて丸い物は殆ど真っ赤になった。それを目当てに遣って来た鳥は始めから鳥の恰好はしていない。破れた葉っぱのような或いはぶつかり合う稲妻のような姿で、霧の気を惹こうとしている。霧は舌を突き出して鳥を舐め獲ろうとした。鳥はその舌を撫でるように身を躱した。「お前、新顔だな」と霧は言う。いや言い損なった。本当は何と言いたかったか、考えると

霧には鳥が白金のように輝いて見えた。眼を患ってしまったに違いない、と霧は思って若い森を探した。「そんな森なんか無い。旧い仲間が食い尽くした」と鳥は稲妻のように言葉を投げた。「知ってるさ。そのお前の仲間の最期もな」と霧は舌をこね回して斜面をずり落ちそうなのを堪えている。そうして舌をこね回しているには、ずっと鳥と言葉を交わしていなければならないのか、それが霧には気掛かりで、嘘でも鳥の気を惹きそうな事を考えようとした。しかし鳥はそれを見破っていて「今日の霧は白金のように輝いて見えるが何故だろう」と先に嘘を吐いた。それは霧には耐え難い言葉で、斜面の適当な窪みの一つに身を押し込めた。鳥にはそれは砂を混ぜたゴムのように見えて、嘴で突ついて砂をほじくり出したくなったが、破れた葉っぱの姿ではどうにも出来ず、そのままふわふわと赤土を塗りたくった丸い物の上に落ちた。赤土に覆われて丸い物は外との接触を失っていたが表面に鳥が留まるとなれば他の事とは違う。鳥が眼を病んでいると直ぐに見抜いた。鳥は長らく口に含んだままの種を丸い物の上に幾つか吐いた。一箇所に固まって種は直ぐに芽を吹いた。窪みを抜け出た霧が盛り土の上で天に向かって尖って渦を巻き始めたが、それ以上大きくは成らず、白い砂を丸い物の表面に撒くだけだった。それでも直に丸い物の表面はその砂に覆われて粗方白くなった。種が芽を吹く一箇所だけは若葉が震えて砂を防いだ。それが鳥には見えた。そうして眼は治ったがその姿は更に鳥から

懸け離れ、葉っぱが朽ちてバラバラに千切れたようだった。或いは弾けて消えた稲妻だった。その姿を拡げる鳥は斜面を覆い尽くし、鉄の嘴に突かれた跡に眼の病を植え付けて行った。盛り土の上で渦巻きの踊りを続ける霧がそれを見下ろし「鳥も斜面の凸凹も白金のように輝いて見えるが何故だろう」と見えるままを言った。嘘に決まっていると思いながら鳥は自らの姿に目を向けた。それは余りに長い間霧に浸されて若いまますっかり腐ってしまった森の姿だったが、鳥だけあって翼は生やしていた。「白金のように輝いて見えるのは翼のせいだ」と霧が嘘を叫んだ。翼はその嘘を風のように孕んで、腐った森の姿を舞い上がらせようとした。無理が崇って腐った森はバラバラに砕けた。しかし砕けてみると、鳥は自らが鳥の姿をしているのを見出した。渦を巻く霧が迫って鳥を拷問にでも掛ける積もりらしい。その霧の渦の中心に嘴を突き刺すと、嘴は鉛のように重いが中心を砕く事は出来た。尤もそれは霧がそう囁いたのが聞こえただけで嘘かも知れず拷問は始まっているか。（二〇〇六年十月二十五日）

秤とは何か

木が枯れるのを黙って見ている間に自分より若い鳥が居なくなっていた。屍は見当たらないが飛び去って行く姿も見ていない。木は一本切りで、涸れた川の底に生えていた。ただ枯れてはいても、見掛けは濃い葉を青々と繁らせるままだ。見渡す限り他には草一本見当たらず、その木だけがそれまで通り鮮やかな緑を際立たせている。老いた鳥達はその緑の葉を嫌った。色の鮮やか過ぎるのが死へと誘うように見えてしまうからかもしれない。そうして枝に留まれず、その上を旋回しながら徒に体を弱らせていた。それもやはり一番若い鳥は少し離れた低い所から黙って見ていた。何故なのかと自らを顧みると、地面に開いた穴に嵌ったまま辛うじて頭だけ出し、涸れた筈の川の底だが、頭から下は全身流れる水に浸かっていた。地面をよく見ると穴は他にもあって、自分と同じ位の歳の鳥が同じように嵌り込んでいた。しかし他の鳥達は速い水の流れに逆らえず溺れて息絶え絶えだった。自分を含めて穴は七つ開いていて、自分はそ

の一番端の他とは少し離れた所に居た。それらを独り黙って見ていられるその鳥は、その見える限りの光景を一息に裏返し、蛇が脱皮でもするようにそこから抜け出した。それで直ぐに新しい光景が独りでに与えられる訳ではなく、それについて鳥は先ずは注文しなければならず、その注文を取りに来てくれるのを黙って待つしかない。それでも時を計る事だけは出来た。計った時は横へ横へと並べられ、そのせいで少しずつ横に押し遣られて行く姿は、鳥の面影はなく蟹そっくりだった。羽は全て毟られていた。所詮羽など脱ぎ捨てた光景に属していたのだ。羽ばかりか鳥である事もあちらに脱ぎ捨てて来ていて、もし蟹になっているのなら、あちらの光景に属していた蟹だけを脱ぎ損ねて来てしまったのだ。直ぐにも蟹の殻を脱ぎ捨てなければ、蟹の姿を通してまたあちらへと逆戻りもあり得る。そこへ誰かが来たようなので「川」を注文した。川岸で水浴びをしているようだが、川しか注文していないので水浴びをするもの出来はない。流れる水の音だけは聞き分けられた。流れる水は、神を敬う事が出来るかどうか自問していた。そして敬う事は到底出来ない、何故なら敬った分窮屈になるだけならそもそも神など余計なのだ、と答えを出した。何度自問しても同じ答えが出てしまうが、それでもまた繰り返さなければ済まない問いだった。水浴びするものはそれに同感し神を余計者扱いして溺れて死んだ。神を敬わずに済むかも知れないのは、こちらでは水の流れだけらしい。その屍の留ま

る所だけ黒く塗られているように見えた。それを対岸から黙って見ているものが、その黒を使って鳥の形を描いた。鳥になってそれが羽ばたいても、流れに足を取られて水から離れられない。その黒い鳥は、徒に費やされる時を計る事だけは許された。計られた時は、水の流れを跨いで対岸まで運ばれ、それを黙って見ているものに預けられる。その預かる姿も鳥で、翼を左右等しく拡げ自らの身を秤にしてそれらの時を調べると、どれも必ず七つに分けられたが、古いものと新しいものが混ざっていて、中には誰かの借り物さえ紛れ込んでいる。しかし神が余計者であるように計られる時もそのようであるべきで、そのお蔭で鳥は自らの身を秤にも出来る姿でいられる。（二〇〇六年九月十日）

花とは何か

働き過ぎが祟ったのか怠け過ぎが祟ったのか、途切れた雲の消え掛かる影は古い知識の失われる徴で、その影を掴もうと羽ばたいても、視力は及ばず雲の行方も知れない。そうしてその影の見失われた方を向いて、目の裏の雲に沸騰水のような息を吐き続けるしかない。落ちてはいるが何処にも落ちない。落ちながら止まっているその柔らかく丸く狭い地面に嘴で傷を付けてしまうと、そこは赤くなる。その傷を隠す積もりで慌てて胸を擦ると、地面は実の熟したように落ちて色を失い、擦り過ぎて裂けた胸に生えた根だけが赤を残し、その赤に急かされて、根は分かれて伸びて拡がる。目の届かない所へまで易々と養分を摂りに行くようだ。その根の裏で休らえて鳥の仲間はあれこれ助かった筈だ。しかし働き過ぎた。或いは怠け過ぎた。赤は涸れて途端に木の根に毒が回る。身動きを奪われた仲間達から切羽詰まった声が起こる。根の毒がその口に入り、そのせいでポロポロと翼が落ち、極彩色の水に沈んだ。翼はそれらの色をてん

でに纏った魚になったので、根元の鳥は、それを分類するのに目を回す。毒の回った仲間達は、無くした翼を追うように次々に水に落ちて分類した魚を競って呑んだ。鳥と魚が鳥の胃袋の中で交わるのだ、彼らに長いヒレが生えてそれを翼の替わりにし、一斉に何処かに飛んで消えたが、その群れの影を雲の影の形に描いて残した。古い知識がピチピチと煌めいた。それらの中を、胸に毒の回った根を生やすまま、鳥は小屋の灯りを目指す。煌めくものが根に纏わり着いて根はまた赤くなる。小屋の壁を突ついたが、小屋の中の別の仲間は翼を自ら切り取った後で外には関心がない。冷たくあしらわれて気が沈む鳥をよそに、根は小屋の灯りを吸い取って自ら光る。それに促されて鳥は、胸元の根を引き裂いて飛び立った。その根を無くした胸の傷のためには何でも食べなければならない。しかしもう飛ぶ力もなく、根の中を転げ回って、根の表面を嘴で削っては、煌めくものを口に流し込むしかない。それで根を全て枯らしてもまるで食い足らない。根が涸れれば風と雨だけだ。それに晒される傷は縮まって肉の中に隠されたが、そうなると風と雨から独り隔てられ、風と雨が全ての世界から消えないために、走り続けるしかない。周りが冷たいせいか胸の傷は火を抱えるようだった。地面の丸くなり過ぎた行き止まりで折り返して爪を見ると、縞模様が浮き出ている。それで土を掴むと、土塊は磁石のように煌めくものを集めるが、胸に火を忍ばせていてはそれらをどうにも出来ない。火が食い込み

過ぎて、胸は裂け裏返しに開いた。すると土塊から、磁力の向きが変わるように、煌めくものが糸を引いて一斉に飛び散って、それを浴びた胸の肉の花は萎んだ。(二〇〇六年六月二十五日)

宝石とは何か

はぐれた雛をやっと見付けて木蔭に導いた。その雛は白い杖を突いていて、それで腐った縄の中から光る点を弾き出して潰していた。それはもう雛の姿には見えず見放され、餌を自分で獲って来なければならないが、雛は産まれた時の方に流されていた。それに気付いて白い杖を足下に突き立てた。時に流されなくはなったが、時の手前に留まる事になった。霜が降り他のはぐれた雛は皆飢えて凍えた。それを数える内に、おかしな形の卵を見付けた。おかしな形なので卵のままはぐれたのだ。親が捨てた訳ではない。おかしな形なので一度はぐれると目の前にあっても別のものに見えてしまい、親はもう見付けられない。その卵は始めから時に流されていない。しかし成長する方をずっと向いていた。卵の形から、卵の中に杖が忍ばせてあるのに雛は気付いた。雛は自分の杖を足下から引き抜いて卵に突き刺した。杖の刺さっていた足下から水が溢れて大きな玉になり、雛と卵はその中に収まって外と隔てられた。雛と卵は抱き合って

ゆっくりと回り、上も下も分からなくなった。卵に食われるかのように、卵に突き刺さった杖は、少しずつ卵の中に埋まって消えた。次は雛が卵に食われる番だ。咄嗟に雛は自分より少し大きいかも知れない卵を抱き直した。時が流れ出した。その流れる方を見通すと、卵を産めない雌が更にその時の流れる先に己の身を貫いて、時を止めようと願っている。卵の中の二本の杖が、時を貫いた。雛は心臓を貫かれるのを感じ、自らが鳥の雛でなく時の雛だったと知った。時の雛の心臓は、二本の杖を替わる替わるゆっくりと食った。食い終わると卵が孵った。拍を刻む双子の時が殻を破ったが、そこは未だ水玉の中なのだ。卵を産めない雌が、嘴を使って時の双子を水玉から救い出し、そのまま喉の奥に流し込んだ。水玉は割れて、時の雛はまたはぐれた。また白い杖で腐った縄を突いたが、光る点は出て来なかった。雛は為す術なく時の中に落ちて二度と何処へも戻れなかった。雌に呑まれた時の双子は、雌の腹の中でも決して交わらず、雌の腹の中に鏤められた光る点を数えた。片方の時は奇数ばかりを、もう片方の時は偶数ばかりを数えた。産めない筈の卵を雌が産んだ。卵は一つ切りでそれを抱いて孵すと、双子の雛が冷たくなって出て来た。それでも雌がその小さな口をこじ開けて餌を与えると、双子の雛は死んだままその餌だけは食べて、それぞれに別の時が流れた。しかし餌に限りがあり雌は片方だけを育てようとし、もう片方は見向きもされなくなってはぐれた。育てようとされた方は

暫くすると時からはぐれ、もう一度死ななければならなかった。見捨てられた方は、ただ死んだまま、時の外の餌を胃の中に蓄えて、ずっと時の雛でいられた。その時の雛は偶数を数えていた方で、二度死んだ片割れの姿を見て、己は自ら数えられない奇数に属していると感じるのだった。それから雌は卵を幾つも幾つも産み続けたが、偶数の卵しか数えられず、その偶数番目の卵だけ孵した。それらは時の雛ではなく鳥の雛になった。奇数の卵は、数えられないのだから無いのと同じで、時に流されて磨かれて石になるしかない。雛から成長した鳥達がそれら石の中を覗くと、そこに数えられない筈の奇数によって流れた時を見透す事が出来て、すっかり魅せられてしまう。（二〇〇六年八月十日）

＊＊＊

蛇に於ける

悪意とは何か

時は僅かしか残されていない。出来る限りその回転を緩めて時を引き延ばしたい。時を引き延ばせればまた天と地をひっくり返す機会も巡って来るだろう。そのために疣を借りて来た。しかし何のために借りたか忘れた。時は相変わらず僅かしか残されていないが平気だ。いきなり強い陽に当てると疣は女王様のように勿体を付けて身を拗らせる。太陽はそれを見て天を巡る速さを少しだけ

緩める。勿論そんな気がするだけで手の届かない太陽などより、疣の身を拗らせる順序の方がずっと大事だ。これに疎漏があれば時はぶつ切りにされる。疣は光りにも熱にも弱い。一刻も早く影の中の水に浸さなければならない。僅かな時は木を生長させて木蔭を作ろうとした。木は細かく枝分かれしてひょろひょろと細長い枝を伸ばすばかりで影を作れない。僅かな時は一直線に空を飛ぶ蛇に火を噴いた。火傷で全身水膨れの蛇が落ちて来て木の枝の中をのたくった。蛇の動きは木の枝を隈無く巡って複雑ではあっても暫くすると元に戻って同じ動きを繰り返したので、枝の中に迷路のような蛇のための道が出来、そこが蛇の体液で段々と汚れ、それが地面に影を二つ落とした。一つは輪を描きもう一つは十字の形になった。蛇のせいで枝の先は折れ目だらけだった。そこから吹き出る液汁が幹の北側を滴って影の中に集まった。陽に当たった液汁は硬くなって鋭利で細かな透けた石のようになって枝に留まった。さてそれらを見ていた枯れた花は、外見だけ少しも枯れていないかの瑞々しさを取り戻し、僅かな時を改めて憎んだ。そしてその外見は、僅かな時を憎むのを已めさえしなければ、木にとっての凶器に等しかった。花は木の枝を撫で回すようにして、面白いようにそれを切り落とした。花は枝という枝を切り、根元近くの五股に分かれた幹しか残さなかった。蛇は死んで屍は粗方銀色の羽の虫に食われたが、樹液で出来た細かな石を纏った蛇の体液だけで出来た蛇の道は残って、幹にのし

掛かった。それでもその影は、相変わらず一つは輪を描きもう一つは十字の形で冷たい液汁を蓄えていた。僅かな時は二つに分かれその影に潜んで時の最後の甘みを染み出して、花から目を離さないまま銀色の羽の虫を寄せ集めた。虫共は最後の時の甘みを吸って脹らみ、羽音を唸らせて花を囲んだ。花は応戦し虫共の猛々しく太った腹を切り裂いて行ったが、限りがないので蛇の道に逃げ込んだ。影の中で僅かな時が絶えた。それでもまだ時は裂かれた虫の腹から微かに流れて更に花を苛立たせ、花は蛇の道をズタズタに切り裂いて回った。花の外見は益々瑞々しさを増したが、それでも五股の幹にだけは歯が立たなかった。花は若い匂いさえ発し別の虫共の気を引いた。寄って来たのは年取った虫ばかりだが、その厳つい体を振り回せば大抵のものは弾き飛ばすだろう猛者ばかりだ。それらが五股の幹に集ってその形を捩じ曲げた。それで花は遂に若い汁さえ出したがそれも束の間、銀色の羽の虫の腹から流れていた最後の時が絶えて太陽も闇に落ちたまま果てると、それでも時を憎むのを已めない花は、疣を借りて来てその瑞々しい外見の上にそれを乗せて身を拗らせたが、女王様のような動きとは程遠くその拗らせる順序も出鱈目で、そのせいでぶつ切りにされた時の隙間を縫って甦った蛇に、花も疣も噛み潰された。それでしかし却って僅かな時への悪意を花のために成就させてしまったのではないかと蛇は悔やんで、何時までも花を憎み続けるしかなかった。

（二〇〇六年九月三十日）

色とは何か

初めに地上を歩いたのは蛇だったが、殺されてそれは忘れられた。歩きぶりの息を呑む美しさが妬まれたせいだ。そんな確かめる術もない話しの出所はやはり、叢を駆けながら誰も見付けられない鍵穴を覗けると自慢する、全身肛門だらけの小さな奴だ。しかしそいつの歩きぶりが見事なのは間違いない。そいつが覗く鍵穴の向こうにしか姿を見せない蛇の歩き方を習得したらしい。だからそいつは殺されるまで周りから妬まれる。そう分かっているので自らの姿をそんな風なみっともない恰好にした。しかし家畜共にすればそれを目にして愈愈踏み付けたくなる。尤も家畜なんて怖くない。怖いのは蜂の巣だ。鍵穴と蜂の巣は区別が付かない。間違って蜂の巣を覗いて揺さぶったりしてしまうのをどうにも出来ないのだから、鍵穴と思って覗くのは何時も命懸けだ。更に厄介な事に、蜂の攻撃に遭うまでの短い間に覗き見られる巣の中も蛇ばかりなのだ。そこでは蜂は全て、蛇に食われてしまっている。しかし蜂を食った蛇は死なな

ければならない。そんな蛇の姿に、全身肛門だらけの小さな奴にも心臓はあって、それが縮んでキリリと痛む。そして奴を死に追い遣るのは、その心臓を掴み出そうとする爪を研いだ手だった。だから寧ろその前に蜂が攻撃を仕掛けて来れば、その手が引っ込んで却って命拾いだ。で、今まで一度も蜂は遅れなかった。今回に限ってその蜂が来ない。手は縮んだ、心臓に伸びた。恐ろしさの余り肛門が全て透けて、心臓の形が肉の中に浮かぶ。しかし肛門に触れる指は腐っていて使い物にはならない。蛇共は蜂の巣を迂回して外に出て、羊の群れを追い始めた。蜂の巣は掌に乗った。腐っているのは指だけで掌は石のように冷たく硬い。蛇共は、逆襲に転じた羊達に踏み付けられ、そのバラバラの胴が草原に乱れ散った。それで辺りはすっかり静かになって、一匹だけ蜂の巣に残っていた蛇が、蜂の巣を破り掌の上で鎌首を擡げた。その蛇だけは蜂を食っておらず、死なずに済むのだ。戻って来た蜂が一斉にその蛇を襲ったが、音を立てて細かく震える蛇に蜂は悉く弾かれた。草原のバラバラの胴が順々に繋がって、弾かれた蜂を次々に呑み込んで一匹の恐ろしく長い蛇になり、地上に居場所を見失って仕方なく空を見上げ、新星の生まれようとするのを見付けた。その新星は時を区分し、新星以前の物事を全て、掌に乗る蜂の巣の中に投げ捨てた。鎌首を擡げていた蛇は蜂の巣に戻り、それらを食いに掛かったが、食っても食っても限りがない。長く胴を繋げた蛇が新星へと跳ねて新星に唾を引っ掛ける

と、新星の姿は曇って時の区分は古びた。それで蜂の巣の中の蛇が食ったものは死を招く毒になった。それを吐いても吐いても喉からは古びた色が出て来るだけで、それも透けていた肛門を様々に染めるので、そうと分かるだけだった。

（二〇〇六年六月三十日）

語りとは何か

太陽は自らの狂気を静めるために井戸を探している。昔もっと酷い狂気に駆られていた時に掘った井戸だ。そのためには盛んに熱を放つ姿を捨てて、近付いても井戸の水が干上がらないまでに自らを冷やさなければならない。命である熱を失って何が出来るのか。自らの喪に自ら服すだけだ。そのような太陽を持ち歩ける奴がいて悪魔などと呼ばれて疎まれてもいるが、そいつは、空から見下ろせる地上を全て冷たい光りで包める。その冷たさに応えて地上を覆う岩肌の裂け目という裂け目から、時の流れが火のように噴き出して止まらない。様々な時の流れが地上を乱舞して風が起こり、その風が冷たい太陽の真下に円形の砂絵を描いた。悪魔は退屈してもう疾っくに眠っていて砂絵に止め処なく涎を垂らす。それで砂絵が濡れると砂の甘みが地面に染み、八方から蛇が引き寄せられて来る。それらの蛇は乱舞する時の隙間を埋めるもので、その蛇共がその隙間を埋めていなくては時が流れる筈はなく、時の流れもまた否応なく

蛇に靡いて砂絵を八方から囲むしかない。砂絵には何処からでも入れる。その
ために綺麗な円形をしている。しかし蛇だけが入れて時の流れは弾かれる。そ
の内に砂絵の中は蛇ばかり溢れ返って、その外にはバラバラにされて止まって
しまった時が、石ころのように一つ一つ孤立して転がるだけになった。悪魔が
目を覚まし、砂絵から幾らでも湧き起こって来るように見える蛇共を次々に喰
らって大きくなって行く。大きくなりながら、真ん中にクネクネした裂け目を
一本だけ作り、その奥に冷えた太陽を覗かせた。それを目にした蛇共は堪らず
砂絵から外に逃げて、それを見なくて済む土地を求めた。岩肌ばかりの地上に
そんな土地のある筈はない。森の中なら太陽を見なくて済む。森を作るための
木々の種を、岩肌の裂け目という裂け目の中を次々に這い回って探し集めた。
しかし時が流れずには種は用を為さない。いや時は、蛇共が砂絵の外に逃げ出
して、その隙間が蛇共によって埋められて流れ出している。しかしそれらの時
はどれもそのまま何処かへ流れて消えて行くばかりなのだ。それはきっと蛇共
が種を持ち歩いているからに違いない。蛇共はそれに気付いてまた砂絵の上に
嫌々寄り集まって、それらの種を全て燃やしてくれと、裂け目から覗く太陽に
頼んだ。砂絵の外で時はまた一つ一つ孤立して止まった。先程よりそれらはず
っと遠くまで散らばって、とても取り返せそうにない。種を燃やせる熱はない。
蛇共は腹を割いて自らの肉の裂け目にそれぞれの種を隠した。するともう見上

げても裂け目の奥の太陽は耐え難いものではなくなった。砂絵の上はまた蛇共で溢れ返ったが、今度は悪魔はそれらを喰らおうともしない。と言うのも、蛇共は悪魔に向かって、太陽の冷たい理由について一匹一匹それぞれ違った事を語り出し、しかもその内容は悪魔の耳には耐え難く出鱈目なものばかりだったからだ。それらを一度に黙らせようと悪魔の方から語る番だった。しかし悪魔には時を操る術がない。そして蛇の語りが耐え難いのは、それらが時の流れによって回されているからだと腑に落ちた。砂絵を直ぐに掻き消しておけば、時を回さない悪魔の語りが幅を利かせただろうが、砂絵は時の産物なのだ。そもそも悪魔に砂絵は見えていなかった。（二〇〇六年八月三十日）

砂漠とは何か

幾つか垂直の崖の丸い窪みはそれなりに考えて彫られていた。そこに更に別の窪みを彫り付けたのは蛇のためだった。それを彫り蛇をその前に連れ出したのは蛇の父だった。と言ってその姿を蛇は見た訳ではない。蛇の気持ちがどうであろうと、それを蛇は父と呼ばされた。一番高い所に彫られた窪みはグラグラ揺れて見えて、庇が付いていた。そこに屡々鳥が留まる。岩に彫られた窪みが揺れる筈がないと蛇は思うが、その揺れによって崖の中の岩が少しずつ動いてその上に庇を拵えたのなら、何故崖はそうせずにはいられないのかを蛇は気に掛けた。蛇のために彫られた窪みはそこから一番離れた一番低い所にあって、眠る時以外蛇はそこに身を押し込めていなければならない。少しでもサボれば窪みは岩の重みで縮んで、他のもっとすばしこい蛇に窪みを盗られてしまう。しかし蛇はこれまで眠った事がない。鳥が大きな氷の塊を銜えて庇に舞い降り、氷を砕きに掛かった。蛇は鎌首を擡げてそれを見上げ、氷の欠片が落ちて来て

額にでも当たれば、それを切っ掛けに眠気が襲ってくれるのではと、我ながら馬鹿げているとしか思えない望みを抱いた。別の鳥が舞い降りその氷の塊を奪おうと嘴を突き立てた。間に割って入ったのが父だった。蛇は初めてその姿を見た。その高い所の窪みはそれまでにも増して酷く揺れ、とうとう崖から飛び出した。庇も崩れ落ち、それまでとは逆にそこは子供でも孕んでいそうに脹らんだ。父は蛇を見下ろし「自分が鳥の争いの調停者でいられるのは眠りを支配しているからだ」と怒鳴った。蛇は居たたまれずに窪みを飛び出した。直ぐに別の蛇が窪みを盗った。少し離れて崖を見渡すとそれは揺籃を傾けた形をしていて、父は赤ん坊のようにその中で気持ち良さそうに眠っている。二羽の鳥が蛇を襲って来て、蛇に何か供え物を捧げるように迫った。蛇に捧げる事が出来るのは、自らの身一つだ。鳥もそれを承知で要求して来る。蛇は鳥の嘴を辛うじて避けながら地べたを這い、土を噛んではその中に何か植物の種を探した。鳥が先にへばって風に吹き飛ばされた。巻き上がる風の方に崖よりずっと高く父の姿が聳え立っていた。父はそこから天の飲み物を注いだ杯を蛇に渡した。飲むと苦いだけだったが、口に溜まった植物の種が一斉に弾けて口腔を針のようにに刺した。蛇はそれに耐えて口を閉ざし父の姿の見えない所まで走った。もしも振り向けば、恐らく父の姿は更に天を突いて延びているに違いない。崖全体をあの脹らみが覆って崖を臨月の腹のように見せているに違いない。幾ら走

っても種を吐き出すに相応しい湿潤な土が見付からない。種の芽を吹くのを、己の目で見たいなどというのは叶う筈のない高望みだ。蛇は干涸らびたが種はひっそり砂漠に蒔かれた。（二〇〇六年七月三十日）

褪色とは何か

一つしかない蛇の耳に穴が開けられた。その耳の他に蛇の姿はない。つまり蛇は蛇の耳でしかない。穴は五つまで開けられて一休みし、その間に穴は臭くなって、更に二つ開けられた。始めの五つの穴のそれぞれから、音で出来た四本足の獣の影が抜け出た。それらはてんでに大きくなってしまったので互いの大きさを比べようがない。後の二つの穴から毛をふさふさ生やした獣が二匹出て来る。片方の毛は鮮やかな五色を入り組ませ、もう片方は黒い。雄と雌だがどちらがどちらか分からない。音で出来た五体の影は、大きさは比べようがないが染み着いた穴の臭みは比べられる。一番臭い獣の影が己の名を花でも添えるように耳の前に添えた。それで残りの四体はそれを遠巻きにするしかなくなった。ふさふさした毛の二匹はそれぞれに近付いて、その名に促されるように番った。番いながら耳を澄ますと滝の音が体の中を響き渡り、五色だった方が三色になり、黒かった方が残りの二色に染まった。番う前はその性別を彼等自身は分か

っていたが、そうして色を分け合ってしまうと己が雄に思えたり雌に思えたりして定まらない。それは格段心地良くもないが特に不快でもなく慣れればそれなりの居心地だが、そのままでは何時果てるともなく番い続けなければならないようで先行きへの不安は嫌でも掠める。七つも穴を開けられた耳の蛇は死んだ振りはしていたが、しゅーしゅーと息づく音は滝の音の中に紛れ込んでくねくねと動き回り、番いはそれをずっと聞き取っていた。音はただくねくねと動き回るのではなく、そうして音の中に幾つも形の違う結び目を作っている。それを耳の前に添えられた獣の影の名に翳すと、その結び目が雄と雌に分かれて番い出す。己らが番っているのでそう見えるだけかも知れないが、そう見えてしまうせいで体毛の三色と二色が次々に入れ替わっているように思えて仕方ない。実際そうに違いない。何故なら、耳の蛇が死んだ振りを已めて回り出し、その肌に映る五色も互いに目まぐるしく移り変わっているからだ。そうして耳の蛇は段々と七つの穴を薄い膜で塞ぎ、己の本来の形を探り始める。尤も薄い膜は直ぐに破れて歪んだ形の穴を開け、その度に耳の蛇はうっすら見え掛けた己の形を歪められる。それともその歪むような形の先に新しい形は訪れようとしているのか。破れた膜の奥にも三色と二色の移り変わりが映っている。それを覗き込めるからにはもう耳の蛇ではなく、耳を覗く蛇なのだ。耳の外に目を遣ると黒い皮が生温かく震えているだけだった。更に首を巡らすと、その皮を

脱ぎ捨てた穴一つない耳が水を汲むように滝の音を一身に受けている。それを蛇は乳を求める赤児のように追うが直ぐに見失った。蛇は五色が回り続けるだけの音のない中に迷い込んでいて、ただ己の垂らす涎を啜られるのを擽ったく感じるだけだ。涎を啜っているのは己の心臓の鼓動だが、啜っているのは涎ではなく乳首から溢れるような五色に違いない。黒く萎れた肌の突起から五色は溢れていた。乳首のようでありながら目を懲らすとそれは耳の形をしていて、色を搾り出すために細かく震えている。蛇はその耳に籠もりたくなってそちらに近付いて行った。しかしそれは恐ろしく長い距離を泳ぐ事だった。やっとすぐ目の前に耳の形を捉えた頃には五色はすっかり褪せ、蛇の心臓には幾つも穴が開いていて滝の音の流し込まれるに任せるしかない。（二〇〇六年十一月三十日）

谷とは何か

豆を火にくべるのに一つ一つに串を刺すのは世界が一本の軸を中心に回っているからだが、串になる物が見当たらない。探せば何とか見付かるかも知れないが、肝腎の火を熾す手立てがない。豆だけは何粒かあり、風の匂いを食べて生きているように僅かに宙に浮いて火を待ち焦がれている。そこに火が来た。火もまた一本の軸を中心に回っていて全てその軸次第で、軸は少しも火を外に分け与える気がなく、豆はただ火を目の当たりにしてお預けを喰らうしかない。仮にもしお零れに預かれたにしても串が用意されていないのでは仕方ない。蛻の殻の穴を数えながら鼠が火に近付いた。鼠は火の軸は見えたが、火の熱ささえ感じられないまま額を穴が開くまで焦がした。火が鼠の脳を焼き払って鼠の頭の中に収まり、掃き出された脳の灰が豆に降り掛かった。灰はまだ熱く、その熱が中に蓄えられると、豆の中心に火が点るようだった。豆は自らの中に燃えている火を感じ取れたが、その火を貫く軸は幾ら見直しても見出せない。鼠は

何度も何度もひっくり返った。軸を中心に回っているようだ。蜿の殻の穴を数えながら次の鼠が遣って来た。鼠にしては鼻が長い。額から火を噴いてひっくり返ってばかりの鼠を見て笑いが止まらない。鼠の笑い声は豆の中の火にも届き、火は段々と一本の紐のように細くなって震え、鼠の笑いに共鳴する姿を見せた。内に秘めた自らの火のそんな浅ましい姿に豆は堪えられず、空っぽの穴の中に一粒ずつ飛び込んだ。穴には鼠の吐いた息が溜まっていて、それに豆の火が着いて穴の中は青っぽい火で満たされ、その鼠の息が燃え尽きるのは末だ当分先らしい。その穴を数えながら蛇が来た。蛇が穴に息を吹き掛ける度に火は赤く燃え上がった。そして穴を数え終わるや火を噴く鼠の額に大きく息を吐くと、火は蛇の喉の奥に移ってそこに留まったが、蛇の喉は始めから火よりも熱いので蛇には何でもない。ひっくり返るのを已めた鼠の頭の底に僅かに残った灰はどれも尖った形で、豆に刺す串になりそうだ。笑う理由を無くした鼻の長い鼠は、笑う理由の無くした事が何にも増して可笑しくてもっと酷い笑いが込み上げる。助けられるのは蛇しかない。鼻の長い鼠は蛇を拝み倒す姿勢で笑い続けた。蛇は口を大きく開け、威嚇する積もりはないが鼠に喉の奥の火を見せた。鼠はその火に飛び込んだ。しかし飛び込んだのは鼠の長い鼻先だけで首から下は蛇の胴体に変わっている。そうなったからには威嚇しなければならない。慌てて喉の火から身を引いた頭だけ鼠の蛇は、その己の姿が何にも増して

可笑しくて独りで笑うだけはどうにも収まらず、それを笑ってくれる仲間を見付けに数えて来た穴の道へ急いで引き返した。穴は未だ青い火を点していて、鼠の頭は平気だが、蛇の胴体は火が堪らなく熱く、火傷で全身爛れてしまう。先にはまだまだ同じ穴が続く。振り返ると口から火を噴く蛇が追って来る。その蛇の額に乗っている鼠一匹に、蛇は操られているように見えた。その鼠の割れた額が風を受けて笛のように音を鳴らす。頭だけ鼠の蛇には、それが大地を罵る言葉に聞こえた。そしてその汚い言葉に乗って、額から尖った灰が赤く焼けた空に向けて順々に撃ち出された。その一本一本の放物線が世界の中心となる軸だった。それは、その放物線の数が、数えられた穴とぴったり同じである事によって証明される。穴の数だけ世界が回り出し、それでもどの世界にも属さず決して回り出さない大きな裂け目は、頭だけ鼠の蛇の仲間が棲む生まれ故郷の谷で、やっとそこを見付けても余りに深い茨の森に覆われて、火傷を負ったまま近寄れる所ではない。（二〇〇六年十月三十日）

血とは何か

乾季は眠りの季節でもある。それが終わり温められた巣から雨空の下に這い出て、湿った冷たい風を受けた。肌は降り出した雨よりも濡れていて、風雨がそれを乾かしさえしたが満足は得られなかった。そんな蛇のために例年蝙蝠が来て巣に誘う。蝙蝠は全身を蛇の上に転がし、蛇の濡れた肌を拭いてくれる。半年分肌に蓄えられた蛇の体液は、乾季の間に乾き切った蝙蝠の体に染み渡り蝙蝠は敏捷さを取り戻す。その敏捷さを得なければ蝙蝠は雨季を乗り切れない。ところでその敏捷な蝙蝠は蛇の恰好の獲物であり、一方体液を拭き取られた蛇は蝙蝠の恰好の獲物である。両者は蝙蝠の巣の中で、どちらかがどちらかを食うまで戦う。未だ生まれていないので何になるか分からない奴が、そのどちらかの死を先取りしてその屍に塗る油の心配をする。そいつは匙を丸めたような恰好で羊水に沈んでいた。子宮の底が抜けたのか羊水は何処までも深い。匙は延び切った。そこはもう子宮の外で周りは羊水ではなくただの水かも知れない。

蛇が蝙蝠の喉を食い千切った。匙は蝙蝠の脳髄に落ちた。蛇は蝙蝠の頭と胴体を丸呑みした。残った二枚の翼は掌が水を掬うような形に重なり、そこに蛇の体液が満たされた。そこに匙は、蝙蝠の脳髄を衝えて浮かんでいて、腕が生え翼の形になろうとしている。なかなか蝙蝠を消化出来ずにのたうつ蛇の腹を、その匙に生え掛けた鋭い刃のような短い翼が裂いた。腹の裂け目からはネバネバした泥は出て来るが呑まれた蝙蝠は出て来ない。翼を生やし掛けた匙は、それでも泥の中に蝙蝠の硬い目玉だけは見付けた。その目玉に見詰められると、虹の色が回るように短い翼の色がクルクル変わる。その色に魅せられて、生まれたばかりの糸屑のような蛇が何匹も寄って来て纏い付いた。透き通っていた糸屑に段々と翼の色が染まる。それらに呼吸器を塞がれ息が出来なくなって匙が死ぬと、色を得た若い蛇達は匙の体を食い尽くしたが、その二枚の硬い翼だけは残した。蛇の体液の中には蝙蝠の脳髄は残っていない。何故なら、その体液と脳髄が交じり合って糸屑のような蛇達は生まれたのだから。いや彼等は蛇の形はして好き勝手に動けもするが、未だ羊水の中にいて生まれてはいない。だから未だ何になるか分からない。外に出るには血が足りない。血はまだ体の中を流れる程には蓄えられていない。それでもその内の、蛇の腹の中の泥を噛む歯とそれを消化する胃袋を持った奴だけが血を増やせる。そしてそれ等が出来た奴から順に匙の形になって羊水の底から滴り落ちた。出来なかった奴等は蛇

の形のまま死んで羊水の底に溜まり外への通路を塞いだ。雨の降り続く中を地べたを這い回る匙共は蝙蝠の恰好の餌だった。匙の中は蛇の血ばかりが満ちて、匙の体ははち切れそうに膨れ、蝙蝠はそれを何時でも吸いたいだけチューチューと吸った。（二〇〇六年八月十五日）

点とは何か

腫れ上がった背中に生えた硬い針が天を突き刺してから水が動かなくなって土までが腐り始めていた。腐った土の中の幼虫が生き延びるには乾いた地表を目指すしかないが、水が動かないせいで乾いた地表は硬く締まって幼虫は歯が立たない。それでも屍となった仲間の腐臭が周りに迫れば硬さこそ命の望みと上を向いて土を噛むしかない。遠くから乾き果てた地表の割れるヌルリと透き通った音が大体同じ間を置いて響いて来て勇気が湧いた。噛んだ土から動かない筈の水の滲み出る感触に続いて体が思わぬ方に傾いた。仲間の腐臭とは硬い殻で隔てられたようだったが、幾ら身を拗らせても噛み付く事の出来る土の一欠片もなく、もっと硬い殻に取り囲まれていた。殻の内側は苦いだけで、ただ一つ仲間の腐臭だけが甘い。そしてその甘い方だけが硬い中でも僅かに柔らかい。それなら屍はもう清められたのだ。そちらに向かう誘惑が襲ったが幼虫は顔を背けた。地表の割れる音は先程よりずっと近付いてヌルリとしたまま濁り

を増す。音と音の間が段々と開いて、しかもばらつき出した。何度も音はもう来ないと諦め掛けた。いっそ音を忘れてしまえるまで途絶えたままならと思うが、忘れ掛けた頃に塞がり掛けた傷口をそっと開くように響いて来る。音だけならその小さな傷口の開け閉めだけで済む。それより音と音の長過ぎる間の方が、三日月型の幅の広い冷たい刃に何時姿を変えてもおかしくなさそうで、それは直ぐにヌルリと振られ一瞬で一切を終わらせるだろう。独りはぐれたばかりに辛い時を過ごさなければならなくなった。あのまま生きながら腐り果てて土に溶けていたら、動かない水の甘さに永久にくるまれていられたのに。しかし前の音からどれだけ経ったろう。今度こそ音はもう来ないのか。幼虫は時を計っていた。砂粒を順に落とすようにではなく、据えられた時をヌルリとした広い刃で薄く薄く剥がして行くように。剥がせば剥がす程薄く剥がされる時の、その止め処なく薄くなって行く度合いで時は計られた。そうしながら幼虫は自分が、蛇になろうとしているのに気付いた。自分だけは始めから蛇の幼虫だったのか、それともこんな事をしているせいか。蛇になるなら、時を計るのも別の仕方でなければならないが、時が更に薄く薄く独りでに剥がれ続けるのを止められない。もう幼虫でなく蛇になってしまった。剥がれる度にその新しく剥き出される時の表面に滑り込んでそこを這い回らなければならないが、蛇の身にはそれは苦になるどころか楽しくさえある。ただ時を計れないのだけが気懸か

りで、それで蛇は何も困らないのだが、剥がれて行く一枚一枚の時の表面にその気懸かりが棘のように残るかして、古い時が古びないまま未来の方へと蓄えられしまう。それで新しい時が少しずつ歪んでしまっているのは明らかだ。水が動かないのはそのせいだ。水は蛇が時を計って流れていたか。蛇に時が計れないなら、その計れないままの時が何処かで燃やされて水は流れるに違いない。そう知れたところで何も困らない蛇に時を計る術が身に付く筈もない。困るのは蛇になる以外の幼虫で、その待たれる未来で古びないままの時を燃やさずには再び水は流れない。それは蛇には知れない。いやその蛇の時への気懸かりから始まって水が動きを止め、今に至って時の新しい表面を楽しく這い回れているなら、その気懸かりが失せた途端に蛇は時の表面から放り出されるだろう。蛇は知らん振りの名人だ。その蛇の目が一点を見詰めた。新しい時が剥き出される度に現れては直ぐに消えていた一点で、それは時を経る毎に消え難くなって目を逸らせない。このままならその点が己の未来であるのは分かったが、それから逃れるのに今から時を計るのでは遅過ぎる。点になってしまう恐ろしさが自らの身を燃やした。それで時は計られた。（二〇〇六年十一月十五日）

時とは何か

蝶を食う虫が壊れた橋を怖がるので、蝶は必ず壊れた橋の下で眠る。蝶を食う虫は壺の形をしていて水に流されてしか動けない。しかし水に流されてばかりでは肝腎の歯が弱ってしまう。時々熱い陽差しで身を灼いて腑までカラカラに乾かなければ、歯どころか壺の底が水に溶けて溺れるしかない。そうして水底に溜まった虫の死骸を浚って念入りに捏ねれば、門柱の材料になる。その左右の高く太い門柱の間の扉の奥に、未だ雄を知らない雌の蛇が棲んでいる。その蛇の全身は蝶の模様で覆われていて、それが生まれ付きか、刺青か、塗料で肌の表面に描いただけのものかを蛇は知らない。蛇は扉の奥に棲むようになってから多分体を動かした事がない。しかもそれに気付いたのは、やっと扉を叩く音を聞き取れたからだ。扉を叩くのは誰なのか。それと全身の蝶の模様とは係わりがあるに違いない。そう思うと蛇は指を全身に這わせて、その感触からそれぞれの蝶の姿を頭に焼き付けて行った。尾から始めて顎の直ぐ下まで指をな

ぞらせた所で、指は蛇のものではなくなった。蛇は生まれたばかりの小さな自分が、腐った肉の匂いのする口に含まれて、ここに運ばれて来たのを初めて思い出した。そしてそれはつい今し方の出来事なのだ。或いは見方を変えればそれは未だこれから起こる出来事だ。指は顎を暫く弄んで、頭には向かわず背中を撫でた。それは背中の何処かに何かを探していた。蛇はそれを知っていたので、その在処を教えた。それで指は、蛇の背中の蝶の羽と羽の重なりの中に小さな冠を見付け、蛇の肌からそれを撮み上げた。すると全身の蝶が舞い出て、前が見えない程に蛇の頭に群がった。扉を蹴破って踏み込む音がする。目の前の暗さに飽きた蛇が生あくびをすると、蹴破った者は蛇を口に含んだ。降り出した雨に濡れて、左右の門柱は少しずつ溶けてクネクネと曲がり始めた。蝶達は競って身を投げ箔のように柱に自らを貼り付けたが、それは片方の柱だけだった。蛇は小骨が引っ掛かったように吐き出され、扉から流れ込むもう片方の柱だったドロドロに溶けた中を泳いで、蝶を纏ったクネクネ曲がる柱まで辿り着かなければならない。その柱から順に剥がれた蝶が舞って蛇の肌に襲い掛かった。蛇は、蝶に食われてすっかり痩せ衰えた。そうかと思うと、逆にモリモリと脹らんで体を伸び上がらせた。その繰り返しで蝶を翻弄し抗った。雨が上がると門の外に未だ生まれてはいけない蛇の娘のそのまた娘が訪ねて来ていた。蛇に代わって、クネクネ曲がる柱が雄の蛇の姿を借り、その娘の娘を呑み込ん

でしまった。蛇はその姿に巻き付いて離れられなくなり時だけが費やされた。
（二〇〇六年七月十五日）

飽食とは何か

借りていた山犬が逃げてしまって、流れ着いた木片を犬の姿に貼り合わせたものを替わりに返しに行くと、東の谷は余所から来た大陸に埋まっている。木の犬は鉛のように重くなり動かせなくなった。山犬だけでなくそれが番をしていた水源も借りていた。東の谷あってこその水源で、地下水をすっかり大陸に吸い取られて涸れた。犬の姿の木片は紙っぺらのように次々に剥がれ、目に見えない犬の姿の重みだけが残った。犬のその重みは枷を解かれた嬉しさに跳ね回りたいが動けない。その重みに圧し出されて犬の足元から尖った木の根が伸び上がって来る。犬の姿の重みがその先端を銜えると、それは木の根ではなく干涸らびた渡り鳥の長い首で、その目は真っ直ぐ精確に東を向いて犬の姿の重みさえ引き摺った。犬の姿の重みは顎に全力を込めたが振り切られた。しかしその重みから離れては、干涸らびた鳥はそこに腹這って黙って項垂れるしかない。東の大陸には、そうして渡り鳥に黙って見詰められるのは耐え難く、端から順に

溶けて消え始めるしかない。それは長い雨を呼び、凍えた犬の姿の重みは雨水に流されて、少しずつ元の姿を現わす東の谷へとずり落ちて行く。その様を見て渡り鳥は生き返り、何年か振りに長い首を素速く振り立てた。その首の向く方へ向く方へと大陸は反転し、その纏っていた泥土を粗方払い除けて本来の姿を晒した。大陸は未だ眼も開かない産まれたばかりの痩せた子犬の姿で、渡り鳥の首が長く伸びて蛇になると、子犬は蛇に丸呑みされるしかなさそうだが、蛇は何年も前からたっぷり腹に溜め込んでいた白い羽虫の幼虫のゲロを、子犬に向けて吐くばかりだった。蛇は元の渡り鳥の長い首に戻って舞い上がり、東の谷へ降りて行く手前の野太い枯れ木に留まって谷を見下ろした。谷底には甘そうな白い滓が溜まっていて、それを目当てに朽ち葉の下を蛇が這って行くのが谷の斜面のあちらこちらに見付かったが、幾ら待っても蛇は谷底に姿を見せない。それを自分がじっと谷底を見詰めているせいだと気付いた渡り鳥は、また長い首を伸ばして蛇になり自らが真っ先に谷底まで降りた。白い滓は凍ったように硬く何の味もしない。それに蛇はまた白い羽虫の幼虫のゲロを吐き掛け、そこで蜷局を巻いてその白い幼虫のドロドロに溶けたゲロに塗れた。そのゲロ越しにやはり白いゲロ塗れの子犬が仰向けに寝転がっているのが見える。慎重に近付けば今度は子犬を呑めそうだ。いや子犬は白いゲロに塗れるのではなく、凍ったようだった白い滓が溶けてその中に溺れているのだ。白い滓は谷底を川

になって暫く流れ、低い雨雲の最後まで残っていた辺りで地下に潜った。白い幼虫のゲロも子犬も地下へ流れて行って、白く濁る谷川は谷を降りた蛇ばかり溢れ、蛇共は息苦しそうにのたうちながら、水面を覆った。渡り鳥の首だった蛇だけはその上で蜷局を巻いて、ゲロを吐き切ると川を遡った。水源では、逃げた山犬が戻って番をしていた。しかし近付くと犬は番をしているのではなく、そこで次々に子犬を産み落として川に流しているのだと分かった。子犬はどれも直ぐに川底に沈んで、川面を這い回るしかない蛇には見付けようがない。子犬が絶えると水源は当たり前のように涸れて、干上がった川底は窒息した蛇共の屍で埋まったが直ぐにそれは白い滓の層になって、蛇だった形跡も失せた。子を産み終えた山犬の腹の中から羽虫の白い生きた幼虫が止め処なく這い出て来て、蛇はそこで口を開けてさえいれば常に満腹で、這う事も蜷局を巻く事も忘れてそこを動けなくなった。（二〇〇六年十二月十五日）

抱擁とは何か

大きな木を伐って幹に埋まっている卵を取り出しては集めていた奴がいて、もう死んでしまったのか姿を見せないが、そいつの嘗ての住み処に卵を見に行く。住み処は森の中にあり、周りの枝を繋いで宙に浮いている。その中に先ず大きな卵が十字に綺麗に並べられているのが目を引くが十字の四つの端で途切れている訳ではなく、そこから小さな卵を並べた曲線が何本も引かれ縦横に入り組んで途切れる事はない。住み処の内側に隙間を見付けるのは難しい。何処も彼処も卵で出来ていると見える。やっと風を通すだけの隙間を見付けて下を覗くと、一面たっぷりとした水を擁する速い川だが、丁度その真下辺りに水の流れの裂け目が見付かる。水にそれを「なぜ」と尋ねる蛇は孕んでいて、大きなお腹を卵の隙間に挟まれて身動き取れなくなっている。頭は隙間から食み出て下の水と向き合っている。水は「卵の匂いの漏れて来るのが耐えられないからだ、でもお前の腹で隙間が塞がれてもう匂って来ない」と答えて裂け目を閉じた。

それに釣られて蛇は瞼を重くして目を閉じた。闇に塞がれた目の一番奥で、見えるか見えないかの小さな点が微かに揺れ、その点を目指せば蛇は、挟まれた隙間を易々と抜けてそちらに泳いで行けた。もう孕んでもいなかった。振り返ると闇に光る裂け目の奥に、産み落とされたもの共の蠢く影が見え隠れする。それを見詰めながら蛇が「子供達は川に流されたんだ」と呟くと、その言葉は波打つ鞭となって蛇の腹に振るわれ、その痛みは蛇の顔から水になって噴き出た。目を開けるとその目だけが速い水に流されていて、振り返ると盲いた蛇が喉元の裂け目から湧き出す小さな卵を次々に呑み込んでいる。その行いが水を逆流させる中で、目は闇に光る裂け目の奥に落ちた。そこには影しかなかったが、影は目を扁平になるまで散々に踏み付けた。扁平な形になって見ると、影は影ではなく川に流されて溺れた蛇の子供達で、扁平な目の端に出来た隙間から、競って目の中に入り込んで来る。それで目は段々と脹れて、扁平なままそれら蛇の子供を孕んでいるような形になった。そんな形の目で見ると、闇に光る裂け目の奥の内側は、何処も彼処も蛇の子供達の脳髄が塗りたくられている。確かに目の中の蛇の子供達の頭はどれも割れていて頭蓋の中の空っぽなのが見て取れる。裂け目は段々と縮んで、塗りたくられた蛇の脳髄が、目の表面に張り付いてすっかり目を包み込んだ。外側を蛇の子供の脳髄で塞がれ内側を蛇の子供の体で満たした目で見ると、盲いた蛇が卵を呑み込んでいるのではなく、

空っぽな硬い卵の殻の割れ目に、孕んだ蛇が次々に呑まれているのだった。呑まれた蛇は自らの腹に首を突っ込んで、孕まれた子供を次々に呑み込んで行き、最後には頭と皮だけになって卵の殻の割れ目から吐き出された。皮が頭をすっかり包み、それらは卵形になって、昼の光りの中をコロコロ転がった。後を追って、目の端の隙間から産み落とされた蛇の子供達が川を渡って行くが追い着ける奴はいない。影を生まない昼の光りが彼らを遮るのだ。それに蛇の子供達は己の脳髄を扁平な目の中に忘れたままだ。扁平な目は彼らの脳髄を蛇の影に変えて産み落とした。目は扁平でなくなり盲いていた蛇の目が治って昼の光りを抱くと、卵の殻の割れ目が塞がり、空っぽだったたその中は、透けて来る光りを咬んでのたうつ闇で満ちた。（二〇〇六年九月十五日）

見るとは何か

眠っている時は知らないが、周りの少しでも聴覚を持ったものに音を聞かせる事しかしない。それによって腹も脹れるし喉の渇きも癒されるし子孫も残せる。自分が針のような形をしていると思っているが、見る物は全て針の形をしていて、その針に開いた小さな穴が全て耳に思える。だから何時もその穴に向かって音を立てている。どのように音を鳴らすかは多分奴にも分からない。その体だけで鳴らすのか、体と何かを使って鳴らすのか、或いは音を鳴らす術はなくて何処か余所から音を探して来るのか。ただ音を聞かせる目的は大体分かっている。その音を聞いたものの周りで起こっている事を知らせるためで、殆ど必ず死が絡む。音で知らせられる事は知れている。様態の変化などは複雑過ぎて知らせられる筈はなく、結局どんな小さな命であってもそれが絶たれた瞬間の、白が黒に反転するような分かり易い衝撃ばかりを扱う事になってしまう。しかしそれなら誕生の瞬間も同じように扱えても良さそうなのに、そんな瞬間に立

ち会えたという記憶もない。誕生の衝撃は死以上に、他の何と比べても余りにも分かり易過ぎて、音の扱える範囲を超えているに違いない。そうして奴は死に囲まれてはいるが、その湧き起こる死の瞬間ばかりの集まりを、止め処ない誕生が更に取り囲んで、新たな死の材料は尽きない。その死以上に湧き起こる誕生の瞬間の集まりを針ばかりの世界の向こうに感じ取ろうとしたが、何かのっぺりとした形が奴に襲い掛かって来てそれを妨げた。それは初めて見た夢を思い出させた。奴はぐにゃぐにゃと形を変える拷問部屋に押し込められていて、ただその中を歩かされていた。ただ歩くだけなのに、それは奴の過去の過ちを再び呼び込むための踊りでもあった。拷問部屋の柔らかい壁は何時の間にか取り払われ、奴は吊された穴に取り囲まれた。奴だけは吊されずに、足元を隠されたまま歩き続けなければならなかった。縞模様が渦を巻いたり波打ったりしている穴の中には、煙草を燻らす蛇が身を潜めていて音の見張り番をしている。煙草の煙の微かな揺らめきで音を察知すると、蛇は音に牙を剥きその毒で音を消していた。蛇はそうして音を消して、それが何になるのか何時も考えていた。考え過ぎて足を無くし、蛇になってしまったのかも知れない。音は死なのだ。それを奴は分かっていたので、そう蛇に伝えるべきだ。そのための音を鳴らすために奴は歩く踊りを已めた。已めるだけで奴は体が裂けるような音をその体で鳴らした。その音は煙草の煙を微かにさえ揺らさず蛇はその音を遣り過ごし、

その音は縞模様に沿うように穴の中で渦を巻き波打った。歩く必要がなくなったからか奴は歩けなくなった。つまり踊れなくなった。代わりに音を満たした穴に脚が生えて歩き出す姿を夢見るところで夢は絶えた。音を聞かせる奴も聞く奴も始めから居なかったんじゃないか、と思って、今にも穴から滑り落ちそうで鉤型になって踏ん張っている蛇は、穴の中を振り仰いだ。そこに自らの誕生の瞬間が見えたのでなければ、そこには赤い肉の裂け目のまま石になったような煙しかない。音は解き放たれ死と絡まずに済んだが、誕生の圧力の方が厄介で何時潰されるか知れない。（二〇〇六年十月十五日）

＊＊＊

石に於ける

味とは何か

神ははっきりと色分けされていた。当たり前過ぎて態態確かめ合うまでもない。しかし時が経って見廻すと、俺の仔牛だけはその色を見分けられると怪しげな身形の影が言い張っているだけで、それを当たり前に過ごしていた連中が居なくなってしまったのさえ気にも留められない。今頃神の色がどうとか言っても聞き流されるだけだ。それでも仔牛は筋骨隆々たる真っ黒な雄牛に成長した。

そこまで育てたのは影ではなく影に囲われた影の骨だった。その影の骨は遂この間死んだ。何時か影から逃げて骨であるのも已めて、未だ見ぬ相手と婚を結びたいと夢見ていたが叶わなかった。その死んだ印に、影はその骨にだけ相応しい色を見付けて来なければならない。そうしない事には影は死んだ骨を何時までも抱えていなければならないからだ。影は牛の眼を刳り抜いた。眼を無くした牛の睾丸が七色の光を放つのを、刳り抜かれた眼が見て取った。影はその眩しさに骨を見失い自らを見失った。生き返った骨が影から抜け出すと影は歯止めを失ったように何処までも長く延び、その果てのない方に牛は勢いよく駆け出した。その遠ざかる姿が殆ど点になってでも見失われないのは、睾丸の発する七色の光りがそれを照らすからだ。そしてそれを見て取っているのも睾丸だった。両眼は冷たい石になって闇の中に置き去りにされていた。その闇の中にこそ自らに相応しい色が隠されていると、骨は勝手に思い込んだ。七色全てが牛を追って影の果てへとしか向かわないのだから、そう思えてしまうのも仕方ないのかも知れない。しかし骨には、石になってしまった眼を開かせて色を見出させる術はない。それなら骨もまた石になって、閉じた眼と同じ闇を見詰めて色を見付けるしかない。「骨に色など要るものか」と睾丸が嘲笑ったが、それで睾丸は遠い点になった牛の姿を見失い、収束していた七色の光りが一斉に弾けた。その光りの錯乱は睾丸の皮を穴だらけにした。そして身に収めてい

た色を全て放ってしまうと、睾丸は神の色を見分けられる眼になり、皮の穴の一つ一つから外を覗く度に違う神を見付けたので、それぞれの穴の一つ一つがそれぞれに神として色分けされた。それでも睾丸は、石になった両眼の闇の中にだけは色を見て取れなかった。それに気付いた骨は「睾丸に色など要るものか」と反撃に出た。それで骨は影に見付かり、また影に囚われた。骨を得て影は延び過ぎた我が身を元の寸法に戻した。牛はその狭さに猛り狂って暴れ、踏み付けられた骨はボロボロにされて影から放り出された。睾丸が皮のどの穴からその骨を見ても、骨は同じ色をしていた。そのせいで睾丸は神の色を見分ける力を奪われた。睾丸に見えるのはその骨の色だけになった。冷たい石の両眼の闇の中さえ、その色に貫かれていた。その石を影が拾って牛の眼窩に嵌め込むとそれは牛の眼に戻ったが、神の色は見分けられなかった。代わりに睾丸が冷たい石になって、破れた皮から転げ出た。そしてそれは闇にではなく骨の色に閉ざされていて、牛がそれを舐めると、様々な神の味が舌の上を転がった。骨は解き放たれた。流石にもう夢は追わなかったが二度と囚われもしない。牛を置いて影はまた何処までも延びたが行方は知れない。（二〇〇六年九月二十日）

愚かさとは何か

何処にも風が無くなった。太陽は風に熱を放ってその身を冷やして来た。風が無くては、太陽が自らの熱で焼け焦げるのは時間の問題だ。首を吊った蜥蜴が巧く死ねずに藻掻きながらそれを見上げていた。風が無くなったのはその蜥蜴の仕業ではないかと考えて太陽は自らの命を絶つように真っ二つに割れた。蜥蜴の両目にその割れた太陽の片方ずつが飛び込んで来た。蜥蜴は死地に飛び込むように天に向かって跳ねた。割れた太陽が蜥蜴の体を挟んで閉じ合わされ、また一つに戻った。その太陽を裏へまで突き抜けて、子を孕んだ蜥蜴が全身を硬い甲羅で覆って白い崖を転げ落ちて行く。後を追うように崖から剥がれた鋭利な石が一緒にバラバラと落ちた。崖下で、一つだけ薔薇色をした石が蜥蜴の甲羅を剥がし、孕んだ腹を切り裂き、太陽の子を取り上げた。それは四本の脚と尻尾を生やした黒く焦げた塊だが、ただ風を欲しがり、仰向けになって脚尻尾をばたばたさせて泣くばかりで、地面がその泣き声の熱を貯め込めば、や

がて地上は何処も彼処も火の海で覆われるだろう。薔薇色の石に着いた蜥蜴の血だけが、それを止められる。性に目覚めたばかりの雄の蜥蜴ばかりが、薔薇色の石の一番鋭利な辺りに腹を擦り付けて、自らの命を次々に投げ捨てて行った。薔薇色は段々と蜥蜴の血の色に染まり、熟した果実のように艶めいた。地平線はもう端まで火だった。石に命を投げ捨てなかった蜥蜴を始め、他の全ての生き物は全て黒焦げの灰になって宙を舞っていたが、石の上で裂けた腹を並べて列をなす蜥蜴の屍だけは冷たいままだ。生き物に続いて石までも燃え出した。それでも蜥蜴の屍を掲げる薔薇色の石だけは燃えなかった。それを燃やさない限り、火はこの地上を新しい太陽に変える事は出来ない。薔薇色の石は、泣いてばかりいる太陽の子の所に来て蜥蜴の屍を食わせ、その熱を冷ました。もう風が無くても済んだ。太陽の子は泣き止み、直ぐに立ち上がって黒ずんだ色の小便を長々としたので地上の火は消えた。空の太陽はもう疾っくに自ら焼けて灰になっていたので、地上は真っ暗になった。太陽の子は何をしたらいいか分からなくなり、狼狽えたまま薔薇色の石と交わってから、石の一番鋭利な辺りに身を擦り付けて自らを二つに裂いた。太陽の子に死の訪れる筈もないのに、更に自らの身を際限なく切り裂き続けた。やがてそれらは蜥蜴の姿になって闇の中を這い回るしかない。太陽の種を宿した薔薇色の石は、鋭利さを失って丸みを帯びながらも、何時まで経っても子を産まず、艶っぽい媚態を晒らす

ままで、性に目覚めた蜥蜴共を狂わせた。（二〇〇六年八月二十日）

傷とは何か

柔らかい卵が背の高い黴の中で温められて歪な石が孵った。初めに石の見た世界はただぼやけていた。しかしそれは近くに見るべきものがなかっただけで、蜘蛛の脚が石を掠めると、それは見えた。酷く手間の掛かる仕事をしているらしかったが、全く時が足らず蜘蛛は朽ちた。それでも石はその仕事振りから転がり方を学んだ。転がる度に世界が一回転するが、その度に世界は明るさを変える。世界は結び目によって出来ていて、それを緊くしたり緩くしたりで、世界が発する光りの量が変わる。石はずっとその結び目の中に居るが、それを締めたり弛めたりは出来ない。それをするのは、蜘蛛の巣を何時も探し回っている湿った息だった。息は、蜘蛛の巣を見付けては吸い取り素早く丸める。それが転がって結び目を擽ると、結び目は世界の悪口を捲し立てる。その尽きない悪口に抗うために世界は自ら光ろうとする。それも酷く手間の掛かる仕事で一時も休ませては貰えない。それまでになく世界が強く光った時、石はその光り

に乗り移った。すると雨でも雪解けでもないのに水が出て、その勢いに石は浮いて流れた。それは石にしてみれば転がらずに済んで、その水に身を委ねる限り世界も回転しなくなった。いや世界が自ら回るのを已めたのだ。それにそれは世界などではない。石が纏わねばならない上衣のようなものだ。石はまだ裸でいられる程、固まってはいない。しかしそのままでは駄目で、固まるにはまず自ら上衣を脱ごうとする姿勢が求められた。石は結び目に乾いた息を吐き掛けた。結び目は林檎の形で現れて、そんな事をされては腐ってしまうし石も流れてしまうだろう、と石を詰った。石はその林檎の皮を破れずその実の中に埋まっていて、それをどうにかしようと独り虚しく回り続けるしかない。悲しいが喜ぶべきでもある。蜘蛛のように手間の掛かる仕事もせずに済むし朽ちずにも済む。林檎は腐って結び目は解けたが石は流れなかった。腐った中に埋もれて息を吐くと上衣も腐った。蜘蛛が遣って来てその上衣に糸を吐いた。その細かな結び目が数え切れず上衣を覆った。それを転がして再び世界の光りが戻って来る方へ運ばなければならないが、時が足らずに蜘蛛が朽ち蜘蛛の糸の結び目も朽ちた。時を待ったように裸の石が全身傷だらけで水の外に流れ出たが、醜い古傷ばかりなのが石には面白くないのだ。埃にまみれながら、傷一つない卵を産むために自ら二つに割れようとして、新しい固い傷口を開けた。傷一つない卵など贋物に決まっているのに。

（二〇〇六年七月五日）

逆転とは何か

時についての噂を数値に置き換えてみると酷い。時を縁（よすが）に身過ぎするものなど居るのか。どれも皆、時を棄てて生きているかの面構え。それでも時の泥濘に嵌って足掻くばかりのものも居て、それはそれで芳しい香りを時の中に滑り込ませ噂を打ち消すに一役買ってはいる、微々たるものだが。それでも時は諸々の見えるものの共らのど真ん中に居座って、尚かつそれらをすっかり取り囲んでも居る筈だ。いやそれで悪い噂の立つ訳がない。時はもっとずっと偏った狭い形でこの見えるもの共らに寄り添って、それらを捩じ曲げ磨り減らしては一人勝ちしていないか。その時を好きなだけ埋められると称する奴が居る。実際ここにこの前埋めたので今それを掘り返して時の脊髄を取り出せば金になる。そんな魂胆だがそいつの体が先に腐って干涸らびて野太い脊髄だけがゴロリと転がって、時がそれを深く埋めた。時の思うまま時以外が忘れ去られる時を隔て、それからそれは掘り返された。しかし土を払い除けた途端、そ

れは一瞬アンモナイトの化石のような姿を晒して直ぐに風に溶けて消えた。その脊髄の化石を永遠に己の足で踏み付けておく積もりだった時は、その風を慌てて追い掛けるしかない。後塵を拝した事などなかった。ずっと最先端の無垢で透き通った見晴らしの中に独りで己を切り開いて来たのだ。暫くして、追われる風が世界の一番端を示す点を見付けるが、時にしたら逆にそこは世界の中心に違いない。その点で行き止まった風は、失ったアンモナイトの形を恋しがるようにその点を真ん中に据えて渦を巻き始める。その見るのも耐え難いものにまで付いて行かなければならないのか。時は風の渦と逆向きに知らず逸れていた。時が逸れて風が風で居られる筈もなく、その渦のまま風は空気のように希薄な石になった。或いは、石の成分が僅かなガスになって溶け込んでいる空気とも見えたが、空気のように形を変えたり何処かに吹き飛ばされたりは決してしない。寧ろ希薄過ぎる分、割ったり削ったり出来る硬い石よりずっと動かし難い。時の後を、その希薄な石以外の全てのものが押し寄せて来ていて、その勢いからしてそれがそっくり時の方に逸れて行ける筈はない。時なしで己のみを侍んで希薄な石は身を躱せるのか。微動だにしないのにその渦巻きの形が奏功した。身を躱したのとほぼ同じ事が起こった。押し寄せて来たものの殆どは時に引き取られた。しかし全てではない。僅かな何事かは凄い速さで渦巻きの真ん中を打ち抜き風穴を開けている。世界の一番端である一点は吹っ飛んだ。

世界の端をなくして世界が世界で居続けられるのか。時にしてみれば、逸れてはしまってもその一点は世界の中心であり、それを失って何処に向かうのか。時は淀んだ。時に追随するしかなかったもの全てが一斉にその時を讃え、時を仰ぎ見ながら嬉々として、端をなくして止め処を失った世界に順々に呑み込まれて行く。そう彼等には見えただろうが、端をなくした世界に何かを呑み込む力などない。結局どれも、時に呑まれ時に埋もれただけ。それを酷い辛いと時を憎まず苦しまずに済んだのは、運に恵まれたのか、それとも愚かで惨めで失笑を買うだけの事か。何れにしろそれらの時に埋もれ重力に従った行き着く先は、時にとっての世界の中心である風穴しかなく、そこを通してそれらを世界の中心の向こうに捨て去った時は、その身軽さを活かして風穴に独り留まり自らを世界の中心に擬した。しかし希薄な石にしてみれば、世界の一番端に擬せられているのが時であり、それが微動だにしない渦巻きの中心に居座るのだった。時の逸れただけで、風は石になってしまった。一点に籠もってどうにもそこを動けない時などに何が望めるのか。時は永遠に閉ざされ息を詰まらせて死んだ。しかし今やその屍も化石となって渦巻きの中心に留まり続ける事で、同じ石は希薄な渦の中心に時を孕む。時を妊った希薄な石は、世界の一番端から反転し、世界の中心に向けて時を送り届ける夢を抱く。再び時の悪い噂で満ちても、何しろ石なのだ。それでも、逆転が果たされた！と考えるのは早計な

のか。尤も早計と言えば全ては早計で、それは時よりももっと嫌われていてどうしようもなく、それに足を取られては折角の逆転も空回りして見え兼ねない。

（二〇〇六年十一月五日）

暦とは何か

表面に黒い豆が出来る病気が流行っていた。一日中風を受ける低地などに転がっていては一溜まりもない。全身が真っ黒に膨れて石の面影もない。果実が腐って干涸らびて堅く真っ黒になったようだ。最初にその病気に罹ったのは、地上に現れてからずっと太陽を凝視し続けていた石だった。その行動と病気との係わりは未だ何も分かっていない。それにその石には、殆ど目に付かない小さな黒い豆が日の当たらない側に一つある切りで、それより増える気配もない。周りに石は見当たらず、自分が元で風下に病気を流行らせた事も知らない。石は奇数と偶数が争う夢を立て続けに見た。両陣営は灰になるまで戦って誰も得をしないのは、夢とはいえ楽しくない。そう思っても夢は石を離れなかった。その内、石と夢の間に溝が出来た。石の周りの草木の芽は、溝のせいで丈が伸びないとこぼした。石はより強く太陽を凝視する事で難局を切り抜けたかった。すると太陽の方から黒い小さな点が数え切れず降って、少しずつ地上を覆って

行った。溝はしかし却って深く鋭い影を刻み、暗い底は見えなくなった。石はやっと黒い豆が表面でなく内部を蝕んでいるのだと分かった。その黒い豆が地上に黒い点を呼んでしまうのだ。裂け目さえ出来ればそこから黒い豆を吐き出せるのではないか。石はそれを魚に相談に行った。魚には子がない。卵は幾らでも産めたが卵の殻が厚過ぎるせいだ。石は水に入ってその卵の塊を水の上に押し出し、それらに太陽を凝視する事を教えた。水気を失った殻が裂け、天から降る黒い点が精となって裂け目に注がれた。暫くしてそれらは魚にはならず電気のように放たれて太陽の方に飛び去った。太陽を凝視する石にだけは、彼等が自らを微かに光らせて太陽に命乞いしているのが見て取れた。石は地上から叫んで彼等に変装を勧めた。太陽は変装を見抜けない。それはしかし己にこそ勧めるべき事ではないか。そう気付いて石は自ら去勢した。その裂け目から黒い豆がドクドクと溢れ出し、溝に流れ込み溝を埋め尽くし溝から溢れた。太陽は初めて沈もうとしていた。溝を埋めた黒い豆は地上の熱にゆっくり焼かれて炭になった。石にはもう、沈もうとする太陽をぼんやり眺める事は出来ても、凝視する事は出来なかった。代わりに溝を埋める豆の炭が太陽を凝視した。それが沈んでからでさえ、溝の中では太陽は地下を貫いて凝視され続けた。その溝の上を、吐き出すものは全て吐き出した去勢された空っぽの石が転がり、その一転がりする度に、その石の表面から太陽の運行の報告を受けて変装を繰り

返す夜は、その記憶で暦を編んで石に返した。（二〇〇六年七月二十日）

知識とは何か

夢魔が光りに溺れて死んでその通夜だった。入れ替わりに生まれた夢魔の顔色は真っ黄色で巧く夢に収まるのは難しそうだ。顔を向けただけで花も枯れる。その顔を枯れ葉に包んで通夜を抜け出した。もう夢魔には戻れず光りに晒されるばかりで、気紛れな冷たい空気を食べて生きるしかない。黄色い顔であれば幾らでももてなしを受けられるという噂が聞こえて来た。扉を開けると真っ黄色な顔ばかり池を囲んでいたがどれも当惑した様子だ。池に顔を映して見ると自分一人が真っ青な顔色をしている。それで摘み出されるどころか隣が優しく話し掛けて来た。「遥々配偶者を救いに来たんですね。」話しを合わせようとすると空気がないのに気付いた。池に全て吸い取られていた。両隣を押し退けて池に飛び込むしかなかった。水中花のように池の中では夢魔の姿を纏えた。顔色など無い。全身水の色でただ夢魔の形だけが漂った。遥々配偶者を救いに来たのだ、と思ってみると、池の底の泥に埋まっている石が、それらに呼び掛け

られているかのようにして見えて来る。その一つを拾おうとすると、もう何度もこれと同じ事を繰り返して来たと思えて仕方ない。そんな自らを罵る事が出来るのも石から噴き出す泡の中の空気を食っているからだ。どの石も夢魔の手を擦り抜けてその手は池の底を引っ掻いていた。その底から池の眼が現れた。眼から青い根が八方に延び池の底に張り巡らされている。その眼に見られて居所のある筈がなく夢魔は観念して水に溶けたが、直ぐに自らがその眼と並ぶもう一つの眼になっているのに気付いた。根は生えず石に取り囲まれてそこに留まれた。そこから見回すと周りのどの石も石の表面の下に眼を隠しているのが透けて見え、それらはどれも真っ青で下ばかり向いている。夢魔の眼はそれらを横目に眺められても彼等に倣って下を向く事は出来なかった。色のない池の眼が青い根を波打たせて夢魔の眼を吸い取った。それは幾つもの色のない泡に分かれて青い根の中を巡った。それでもそれはまだ眼で、下は向けないが、青い根を破って順々に外に浮き出て池の中に行き渡った。池の水面が激しく破れた。配偶者が身を投げたに違いないがその沈んで行く姿がない。何故ならそれはもう直ぐに池の底に届いていたからで、それによって池の眼の青い根はずたずたに切り裂かれ、池の底も割れてその割れ目に石が次々に呑み込まれていた。それを見下ろしている池全体の水が夢魔の眼だった。割れ目に呑まれるのは石だけでそのせいで水は保たれた。割れ目の奥に配偶者を住まわせなければなら

ない。そのために石は幾らあっても足らないが石の尽きる気配はない。根を断ち切られて視力を失った池の眼が池の水を小さく千切っては次々に石に変えていたのだ。配偶者の住処が出来上がり割れ目が塞がれた。それでも池の眼は池の水を石に変え続けた。池は何れ石で埋まるだろうか。しかしそれは未だずっと先の事だ。それより、それら石の中の石の眼の奥には夢魔の眼が潜んでいて、光りが届くのをひたすら恐れていた。石の眼は青いどころか全体に黄味を帯びているのなら、既に光りに侵されているのだ。夢魔の眼は僅かに青を滲ませて抵抗した。その小さな青い痣のように見える中に、光りからは知られない事が含まれているのは石にも分かった。（二〇〇六年九月五日）

蝶とは何か

空気が空気の致命的欠陥に自ら気付いて蝶に姿を変え、己だけ助かろうと羽根を振り立てた。行く先々に首回りを血塗れにした獣の屍は絶えない。空気を吸えば喉が裂ける。吸わなければ窒息する。しかし蝶になった空気をどうやって吸ったのか。空気が蝶に姿を変えたというのは、ただ己の欠陥を逃れたい空気の思い込みか。いや空気は真っ先に己自らを殺していた。飛び回る蝶は、その殺された空気の中を生きられる種が、偶々居合わせただけだ。殺された空気の欠陥は殺される前より更に酷く、それは蝶の姿に巧く乗り移った。その舞うのを目にするだけで、生き物は殺された空気を吸わされてしまう。その蝶が、地面の直ぐ上を流れる生温い一筋の風を辿って、高い崖の下の大きな二つの石の間の奥の洞穴に誘い込まれた。中は空気より少し重い別の気体が満ちていて蝶の羽根を直ぐにボロボロにし、羽根をなくした蝶はぎこちなく洞穴を這うだけになった。その地べたの至る所に薄く蜜が塗られている。これまでに吸ったど

の花の蜜より甘い味を蝶は知って、羽根をなくした辛さなど綺麗に忘れ夢中で洞穴を這い回った。しかし蝶がそうしている事で、蝶の頭の上では殺された空気と別の気体が激しく鬩ぎ合い、その渦を巻いて擦れ合う音は洞穴を響き渡っていた。当分決着は付きそうになく殺された空気の方が攻め込んだ分だけ我が物顔はしていたが、洞穴が奥に何処まで続くか知れないでは、対する別の気体の方が懐は深いのかも知れない。蝶は蜜の中でも特に甘い蜜の細い道を見付けて、その道を辿って洞穴の外まで導かれた。その出口の片方の石の裏側の凹みに、ぽつんと一株だけ生えている赤い茸を見付けた蝶は、その茸の裏側に張り付いて身を潜めた。外敵の目を逸らしている積もりだが、洞穴の中から見れば逆に格好の標的ではないか。空気とは別の重い息を吐く生き物が洞穴に棲んでいて、そいつが蝶を狙っているとしたら。殺された空気にはそれは自らの危機でもあって、それまで以上に洞穴の中を吹き荒び洞穴の一番奥の行き止まりに行き当たった。そこにも赤い茸が一株生えていて「外は春か」と繰り返し尋ねてばかりいる。殺された空気が「季節は殺した」と答えると赤い茸は「殺されたのはお前を産んだ親とお前が産んだ児だけだ。どちらもお前に殺されて然るべきだが」と笑った。つまり空気は己を殺してはいなかった。身代わりを立てて己独りは殺された振りをして生きていた。そこで空気は改めて己自らを殺し、洞穴の行き止まりで屍となって横たわった。そこへ赤い茸が胞子を落とし洞穴

の行き止まりを赤一色に塗り込めるまで茸は殖えたが、そこから洞穴の中を拡がっていく気配はない。蝶の辿った特に甘い蜜の細い道が、その拡がりを食い止めている。その細い蜜の道は静かに息をしていた。その蜜の道こそ、洞穴に棲み付いて空気とは別の気体の息を吐く生き物で、洞穴に塗り込められた蜜はその体液で、赤い茸を食って飢えを凌いでいるのだった。外に出て空気を吸えば空気に殺されてしまう。洞穴の中で自ら吐いた息をまた吸って、じっとしているしかない。しかし赤い茸を殖やすには、新鮮な殺された空気がなくてはならない。羽根をなくした蝶を態と洞穴の外に逃がしたのは、同じ蝶をまた洞穴に呼び込むための囮にしたいからだ。赤い茸をそこに一株だけ据えたのも蜜の道の仕業だ。しかし蝶は二度と来なかった。来る筈がない。洞穴の行き止まりで死んだ空気が、地上の全ての空気なのだから。赤い茸がその空気の屍の養分を摂り尽くしてそれ以上殖えなくなり、その赤い茸を蜜の道が食い尽くして飢えて死んで、蜜を塗り込めた洞穴と、屍となって愈愈甘い蜜を滲ませる蜜の道が残った。羽根をなくした蝶は、その蜜を吸って何時までも若いままだった。長い時が、高い崖さえ跡形なく削り去り洞穴の出口の大きな石を粉々に砕いても、洞穴の蜜は溢れるままで、しなやかに益々若々しい蝶は、砕けた石の舞台の上で、何処までも死滅した世界を前に独り踊り惚けて生きる喜びに酔い痴れていられた。

（二〇〇六年十二月二十日）

願いとは何か

西の雲行きで天候が直に荒れると分かっているなら、何処に通じるか分からない扉を開けてはいけない。偶々見掛けた扉を開けようとする奴に暗い西の空を指差して注意するとその指が腐った。開かれた扉は叢のそこだけ窪んだ所にあって地下に通じているのかと思ったら、確かにそこから階段が降りては行くが、その奥に真っ青な空が覗けた。逆立ちをして逆さまにそこを降りて行けばそのまま天界へ昇れそうだ。指を腐らせた奴は天界からの使者を気取って、先ず開いた扉を閉ざし、噛み切った腐った指をその扉に塗りたくって封印した。扉の開いていた僅かの間に、咳の止まらない病の元をたっぷり含んだ逆さの天界からの風が地上に吹き上がっていた。叢の周りは広い石原で風はそこで回って石だけがその病に罹り、どの石も咳が止まらず辛そうに転げ回り激しく互いを打ち合った。力尽きた石から順々に死んで動かなくなった。死んだ石の数が増える程流行り病の猛威も収まる気配だが、それを拒んで仲間の屍の中から転げ出

て閉じた扉に打ち当たる石も幾つかある。それらの石は、外から見えない程微かでも決して咳を止めなかった。扉の前に落ちているそんな石を拾おうとする奴は、忽ち全身の骨が動かなくなって死ぬまで下を向いて苦い涎を垂らし続けなければならない。慰めは、取り分け気に入った石に涎を振り掛け涎まみれの石の表面に小さな泡が立てば、それで石の咳を見破れる事だ。その有りのままを恋の相手に伝えると恋の相手は扉を蹴破った。扉の奥は真っ暗で地下に通じて見えた。風は先程と逆に扉の奥に向かって吹き込んだ。待っていたように涎まみれの石は風を吸うその闇に飛び込んだ。深く落ちて行くと思えた闇は案外狭く、物言わぬ柔らかい体の大男共が鮨詰めになっている。恋の相手が続いて入って来て、大男ごとその闇を一跨ぎすると、闇の奥で石は逆さになって手足を伸ばし、恋の相手は逆さになって手足を椀がれ、心臓を病む石になった。大男共がゆっくり体を揺らすと肉と肉の擦れる音が歌になり、その歌で大男共の肉が熟して酒の匂いを発した。歌は三つの景色について繰り返していて、心臓を病む石はそのどれか一つの景色を選びさえすればそこを抜け出せるが、なかなか一つに決められない。大男共の溶けた肉が少しずつ酒になって闇を浸して行く。手足を伸ばす石は、涎を拭い落とすと激しく咳き込んで止まらなくなった。心臓を病む石が酒の中に落ちて心臓を震わせると、酒は全て闇に呑まれ、闇は裏返ってその奥に青空を覗かせた。その青が心臓を止めると石は恋の相手

に戻って扉の前で死んで、苦い涎を何時までも振り掛けられた。手足を伸ばす石は小さな青空を抉じ開けて、その先に身を乗り出そうとする。しかしそれは青空などではなく、空色の手に取れる果実のような塊で揉む程に毒を吐く。毒を浴びて甦った恋の相手は涎を垂らする口に小便を掛け、恋する同士、涎と小便まみれで抱き合って涎と小便の混じった中に真っ青な空を捏ね上げ、その空を抉じ開けて、その青い拡がりの中に溶けた。手足を伸ばす石は、同じ毒にその手足を椀がれ、咳をするだけの石になっていた。その咳の一つ一つに目を懲らせば、恋する同士が溶けて行った青空が小さな泡のように浮かんでは弾ける。何処を見回しても扉の跡さえない。使えないものは消えて行くしかないのだから。その扉と係わって独り消えずにいるのなら自分に何か使い途が残っているのだろうが損したように思え、損を取り返したいと願わずにはいられないが、咳が止まらないのはきっとそのせいだ。その石を指差す指が腐って落ちる度に知らずに願いは叶っていると天界からの使者を気取る奴なら言うだろうか。奴のした封印だけは何処かに残っている。（二〇〇六年十月五日）

灰とは何か

光りも闇も知らない目だった。その目に見えるのはその目だけだが、その見えた目は光りと闇を孕む妊婦の姿であり、その雄と雌が絡み合うような匂いで、光りを知る目や闇を知る目を惹き寄せては、それらの中の光りと闇を刳り貫いて貪り食っていた。食われてしまった方は、光りや闇を知るままでも、それを二度と採り入れる事は出来なくなった。そうなってはもう目の振りをしているだけだ。その光りを知る偽の目と闇を知る偽の目が同じ方を向くのは、光りと闇は紙一重と知っての事で、勿論その向く方に光りと闇がある訳ではないが、偽の光りと闇ならそこにある事には出来る。いや偽とはいえ、その光りと闇を産む妊婦の姿がなければ始まらない。偽の目は互いに強く擦れ合って表面を爛れさせた。その傷が膿んで、その膿の塊に露を落とせば妊婦に仕上がる。その露の在処を知るのは、光りと闇を行き来出来る火だけだ。火にとっては火だけが本物であり光りと闇は常に偽物で、その偽の光りと闇が裏で交わって露を滴

らせている。その露を受けて白い灰は何時も濡れている。その灰を白く見せるのも光りと闇を行き来する火の仕業だが、火はその白さに光りと闇を見失い、居場所を無くして落ちて行くしかない。灰も白さを失い露の滴り落ちる音を頼るしかないが、火は音も奪って行った。そうして音が全て消えると火は実は音だったと知れる。光りと闇を行き来出来るのは音だけだ。落ちて行った火は固い種になっていた。その火種は音の種でもある。しかしその固さの中に音は一切封じられていて、その微かな匂いが種を覆うネバネバした汚れの匂いに混じるだけで、その音の匂いを嗅ぎ分けられるのは光りと闇を孕む妊婦だけだった。その姿は光りも闇も食い飽きて愈愈孕んだものを産む機が熟す気配で、それには音が待たれたが音の匂いを幾ら嗅げだところで音ではない。その内に妊婦である事が疑われ出した。ただ光りと闇を貪って溜め込んだ腹を脹らませ、しかも何を溜め込んでいるかも知らずに動けないでは、石になるしかない。しかしそれは目でもあって、石にされたのを恨み、偽の光りと闇しか知らずに種に籠もってしまう火を殊更憎んだ。石は種を見捨てて露を探しに出た。その石を導くのは石には見えないが火であるしかない。そこには石と火しかないのだから、石が何かをすればその何かは全て火であり、火が音であってもその音が火であって、音の匂いの放たれてもそれも火だった。そしてその燎原の火を見て取れるのは目である石の他になく、火を見て初めて目は光りと闇を知った。それが

自らを石に変え石の中に満ちているとも知れて、そう知れれば石を自在に火に溶かし、溜め込んだ光りと闇を尽きるまで放つ事が出来る。知るばかりでなく目は、そうして光りと闇を己の中に映した。その映された光りと闇は、光りの石と闇の石になって目の外にバラバラと零れ出し、それによって火は段々と塞がれて遂に全ての火が収まると、そこは物音一つしない暗がりになるしかない。光りの石も闇の石も、見えない露の音を聞こうとはするが、灰の匂いに引き摺られるだけで、一滴の露となった目が灰に落ちて灰が妊っても、それが何を孕み何を産むかは分からない。（二〇〇六年十二月五日）

膜とは何か

赤い物を並べるよう山の向こうから命令が出た。山は真っ暗だし命令の意味が分からない。誰の命令かは分かるが、向けられた先が分からない。こちらは山陰に沈んで山よりもっと暗く誰が居るのか居ないのかも知れないで、どうやって命令は受け取られたのか。そんな疑問に囚われているのはお前だけで、赤い物はもう一列に並び始める。しかしどれもまるで駄目で一纏めに捌けられた。求められているのは、辛うじてその形が暗い中に見て取れる程の物でなく、山陰を切り裂くようなザラザラと鋭い赤を止め処なく垂れ流す物。そう気付いたのはお前だけで、それならお前がそれを持って来ないでどうする。と問われて、お前と呼ばれた奴は山陰に溶けて無くなるように逃げた。命令だけ残って自らが命令なのだと自らに言い聞かせるため、それはそこでクルクルと回り続けた。そうはしていたが何を回っているか忘れた。しかも回っているとも見えず一本の骨だ。忘れられた赤い物が遣って来てそれを手に取ると、鉄のように重く冷

たく硬い。その濡れた手から錆のような赤い粉が流れ出て止まらなくなった。もう山も山陰も萎んで遠くからしか見られない。赤い物は山と陰抜きで、その粉のための話しをでっち上げるしかなくなって、偶々目に付いた丸い穴に向けて斜めに溝を切り、赤い粉を強引に流し込もうとした。それでどんな噓話しが出てくるのかな。と問うのはお前だけだ。噓話しが欲しいのはお前だけだ。愈愈お前はもう出て来るしかなくなる。取り敢えず蛞蝓にしておいてやろう。それも金色の。それが一匹でなくゾロゾロ出て来て一塊になって丸い穴を塞いでしまう。いやもう既に丸い穴はすっかり埋まり、溢れ出る赤い粉に乗っかってグラグラしていて蛞蝓の塊に熟せる芸当じゃない。お前は蛞蝓の塊に見せ掛けた金色の石だろう。と思うと金色はみるみる剥げ落ちてすっかり真っ黒だ。剥げた金の欠片は斜めの溝を逆流して来る赤い粉に運ばれて、しかしその行き先が問題だ。溝の斜めなのが活きてくる。斜めに上るのか下るのか、どちらかしかないがどちらにも見えない。欠片の一つ一つに細い糸を結んで、その流された痕を辿ってみる。するとそう見えない通り、糸は上っても下っても行かないのに何処へか延びては行く。赤い物は、鉄錆の匂いで噎せ返る波の形の風の大きな塊の天辺へ持ち上げられ、そこで砕かれてその赤によって風の波頭を際立たせるばかり。手放されて、骨になった命令はその赤い波頭さえ見下ろし、飴のように伸びながらどちらに向くとも定め難く湾曲して、その形の通りに絶え

ず向きを変えて回っていた。そこへ向かって溝は戻って行く。赤い粉の流れも金の欠片に結わえた糸も、そしてそれらからずっと遅れて真っ黒な石のお前も、その溝を導かれて行くしかないが溝の体を成していない。末だ末だ伸び続けて曲がり続けて回り続ける骨を追うのに、それに付き合わされて溝のまま居られる筈もない。それでも粉や欠片や糸ならどうにか付き合えるかも知れないが石はどうしようもない。見かねて石を骨へ押し上げようと波頭の赤い物が下から息を吹き掛けたのが拙かった。粉も金の欠片も吹っ飛び、転落した石が風の波頭を砕く。砕けた風に含まれるまま赤い物は八方に散り、風の已んだ所に留まって薄く拡がりながら繋がり合い、山と山陰を覆い尽くす膜を作った。曲がり果てた骨がその上で踊り回れば、命令の伝わった事は、山がザクザクと削られる音で確かめられた。山が削れて平気なのは蛞蝓だけだ。山の大きな欠片が真っ赤になって並べられるのを、暢気に眺めて居られるのはお前だけで、何をしろとも求められていないのでただ一匹で済むし、金色は汚い。（二〇〇六年十月二十日）

迷いとは何か

背景に拡がる広い海が迫りながら、物を並べるに打って付けの何処までも平坦な陸地で、海流に乗って丸太が陸地の端に辿り着けたのは、その丸太に塗られた腐食を防ぐ蜜のお蔭だった。蜜が陸地の端に擦り付けられると、陸地は擽られて身を捩るようにあちこちに小山を盛り上げた。背景の海はその小山を嫌って水位を上げたので、海流との断絶は際立って肉眼でも見て取れる。勿論陸地は海流に寄り添うので背景の海だけが浮き上がって、地平線は背景の海の下に沈むしかない。海流は細る一方で涸れようとしていた。陸地がそれを救い出し陸地の中の幾つかの水溜まりを結んで巡らせた。それでも海流ではあり続けて、背景の海の水位さえ元に戻れば、直ぐに深みを取り戻して陸地に大波を寄せる構えだ。しかし海流から隔てられた背景の海は蒸発するばかりで濃くなって段々と窄んで行く。そこに沈む地平線もまたそれに合わせて窄まなければ海の重さに耐え切れない。この時のために蜜を届けさせたのだ。蜜はもう陸地の奥深

くまで染み込んで、種を運ぶ風さえ来れば種は直ぐさま芽吹いて陸地は一斉に森で覆われる。しかし風は一匹の獣によって押し返されていた。獣は海流を住処としていたが陸に上がるのを潔しとせず、海流でも陸地でもない生暖かい暗がりで手探りし、細かな泡ばかりを掻き集めていた。その泡が弾ける度に僅かに海水の発酵した香りが立ち、獣の毛に少しずつ染みて体の動きを重くした。泡を集める力さえ不足では暗がりに沈むのを待つしかない。それは泡も同じで獣の道連れとなるのは明らかだ。泡は弾けて立つ香りを風に向けた。風に染み込んで風の力を使って獣を海流に導くしかない。しかし風は発酵した海水の方へと吹いて渦を巻いた。その渦の下に発酵した海水を見付けた訳ではない。そこは空っぽだったが、そこだけが空っぽだった。香りはその中で安らい、風の渦の力を借りて楽しく歌った。その決して途切れない歌に種が落ちて芽を吹き森が出来る。ただ歌から養分を得られる筈もない。森は細く柔らかく長く伸ばした根をのたうち回らせて、陸地の裏側から滴り落ちる蜜を吸った。森はそれで益々深くなり歌もそれに合わせて艶めいて滑らかに伸び上がり、背景の海に沈んだ地平線にまで届いた。息を吹き返した地平線は歌に倣うように自在に曲線を描き、背景の海の重みを少しずつ撥ね退ける。獣が暗がりに沈んで化石になる程の時が経った。暗がりは疾っくに風に吹き払われ、化石は背景の海と陸地の断絶の中にゴロリと転がっている。それでも背景の海と陸地とは長い時を

懸けて、いい加減折り合っている。断絶を目立たせているのは、そこに転がり込んで朽ちる気配のない獣の形の石だけだ。正確に言うなら石になった獣の眼差しだけだ。その石の眼差しが海と陸地の古傷を拡げているのか。いや歌もまたそこに艶めくまま滑らかに流れ渡り、背景の海を陸地から押し上げている。しかしその背景の海は、蒸発して窄むどころか漫々と水を湛え波は尽きない。それでいて何処までも平坦な陸地と何処かで折り合って、陸地の果てに地平線が頭を擡げる事はない。その地平線を隠すために終わりのない歌が求められているのなら、その歌の行き着く果てを追うしかない石の眼差しは暗がりに迷うばかりだろう。それとも石の眼差しが歌を求めているだけなら、迷いは艶めく曲線を描き続け、　深い森の奥の蜜の味へと石を攫って行くか。　（二〇〇六年十一月二十日）

笑いとは何か

その禿げ山の頂には天に向かう梯子が架かっている。地上からそこまで登れるのは悪魔を言い負かしたい若い魚だけで、天からそこまで降りられるのは魚を言い負かしたい生まれて間もない悪魔だけだ。悪魔が降りて来ていないか、山の脇の湖で魚は何時も山頂を見張っていた。湖の周りも禿げ山と同じ硬い地肌が剥き出ていて、少し離れた斜面に森があった。森は半年毎に焼けた。半年ですっかり成長する植物だけがその森を甦らせるが、半年毎に恐ろしく乾いた熱い風が吹いて、帰って来た動物諸共森を焼く。風は已まず、燃えた動植物の灰は動物の重い骨だけを残して悉く吹き払う。更に風は禿げ山に当たって山肌を焦がし、崩落した大小の石が湖を迂回して焼けた森に転がり込む。それらの石は森に残った動物の骨を殆ど粉に成るまで砕き、森を更に下った所に開いた大きな穴に落ちて行く。覗き込むと遙か下に急流が流れていて、落ちた石を全て下流に運び去って行く。透けて見える流れの底は、ただツルリとしていて

小石一つ残さない。その水の威力を、穴の縁にずっと引っ掛かったままただ一つ落ちずにいる石が見下していた。その脇を、半年毎に物凄い量の石が物凄い速さで通り過ぎるが、年を追う毎に、その落ちずにいる石と転げ落ちて行く石との隔たって行くようでもある。穴の位置も少しずつ動いて遠ざかるようでもあるが、はっきりした事は分からない。何故なら石は、その半年毎に繰り広げられる仲間達の大移動の際の、その地鳴りの大音響の中でだけしか目を覚ましていられないからだ。それが過ぎれば、弥増す眠気との戦いを通してしか、ものを見る事が出来ない。その筈が今回、禿げ山を登って行く若い魚の姿に目を留めると、眠気が一向に襲って来ないのだった。降りて来た悪魔と、魚は山頂で言い争いを始めた。しかし悪魔と魚とは瓜二つで、互いに相手を言い負かしてもそれは自らを言い負かした事にもなってしまって言い争いは果てしない。見兼ねた湖が「魚は水に入り、悪魔は森に入れば、互いを分け隔てられるだろう」と叫んだ。それで湖の底が抜け、一気に水は落ちて湖は涸れたが、その水は直に焼けたばかりの森の斜面に鉄砲水となって噴き出た。森を覆っていた動物達の骨灰は全て流れた。その骨灰が肥料となって森を甦らせていたのだ。それを失った斜面に森は戻って来ないだろう。帰る場所を失った魚は梯子を登るしかなかった。逆に悪魔は魚の使った後の汚れた梯子は使えず山を下りるしかない。湖の跡を過ぎ森の跡を過ぎ一つ残る石の側も通り過ぎて、悪魔は穴の縁

から恐る恐る遙か下の急流を覗いた。「あんな急流じゃ一溜まりもないぞ、まさか飛び込む積もりじゃないだろうな。」と石が尋ねると、悪魔は「水なしでは生きられない」と答えた。石は「お前は何時から魚になったんだ。お前は悪魔だろう。流れた骨灰を追って行けば何処かに森は見付かるだろうに、そんな事も分からないのか」と言って笑った。悪魔は穴に飛び込み、急流に弾かれて粉々に砕けた。水を求めてではなく、二度と石に笑われるのが嫌だったのだ。それから石の前に笑えるものは二度と遣って来ない。（二〇〇六年八月五日）

定義集

著者　u_

© 2006 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published